

---

# 聖杯の守り手達(Fate/EXTRA × 魔法少女リリカルなのは s t s)

ホーエン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖杯の守り手達（Fate/EXTRA×魔法少女リリカルなのはsts）

### 【Nコード】

N1683Q

### 【作者名】

ホーエン

### 【あらすじ】

「戯言を抜かす出ない！ この者は余の奏者だ！！」

「この方は私のご主人様なんです！！」

その声が、これから始まる僕の長い長い物語の始まりだった。

## 登場人物紹介（FATE側）（前書き）

話が進むたびに項目が明かされていきます。  
ちなみに作者オリジナル設定もあるのであしからず。

## 登場人物紹介（FATE側）

名前：衛宮 時雨

年齢：？？（外見年齢から二十歳前）

性別：男

魔術回路：A

ステータス：筋力D 耐久D 敏捷C 魔力A（-） 幸運B（+）

特技：？？

固有スキル：？？

人物紹介：仮想霊子世界セラフで行われた128人のマスターによる聖杯戦争の勝者となった人物のオリジナル。何故かコピー（勝者）の記憶を持っているが、理由は現在不明。

性格は基本的に大人しく、お人よしだが、意外と頭の回転が速い時がある。何か都合が悪い事があると直ぐに現実逃避したくなる節がある。

魔術回路のランクはA（遠坂凜はA++）判定を持っているが、魔術はほぼ使えない為、サーヴァント達に魔力を供給するだけのエンジンと化している。供給量に加えて生産量も多い為、本来なら大量の魔力を使用する儀式魔術系に特化していると思われる。

肉体ステータスは普通の人間として判断。何げに幸運値が高い（笑）

CLASS：セイバー

マスター：衛宮 時雨

真名：??

性別：女性

宝具：??

武器：韻鉄の韃「アエストウス・エストウス原初の火」

ステータス：筋力：B + 耐久：B 敏捷：C + 魔力：D 幸運：

B + 宝具：??

「クラス別スキル」

対魔力：C

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法等、大がかりな魔術は防げない。

彼女自身に対魔力が皆無なため、セイバーのクラスにあるまじき低さを誇る。

騎乗：B (B ∪ A +)

騎乗の才能。大抵の乗り物なら人並み以上に乗りこなせるが、魔獣・聖獣ランクの獣は乗りこなせない。ただし固有スキルの使用によっては変化する。

「固有スキル」

皇帝特権：EX

本来持ち得ないスキルも、本人が主張する事で短期間だけ獲得できる。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、等。

ランクがA以上の場合、肉体面での負荷（神性など）すら獲得する。

・ホーエン的にこれを見て、「あれ、何という反則スキル」と思いました。

??

CLASS : アーチャー

マスター : 衛宮 時雨

真名 : ロビンフッド

性別 : 男性

宝具 : 祈りの弓

ステータス : 筋力 : C 耐久 : C 敏捷 : B 魔力 : B + 幸運 :

B 宝具 : B

「クラス別スキル」

対魔力 : D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。

魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動 : A

マスターからの魔力供給を断つても自立できる能力。

ランクAならば、マスターを失っても一週間は現界可能。

「固有スキル」

破壊工作 : A

戦闘を行う前、準備段階で相手の戦力をそぎ落とす才能。トラ

ップの達人。

ランクAならば、相手が進軍してくる前に六割近い兵力を戦闘不能に追いこむ事も可能。ただし、このスキルが高ければ高いほど、英雄としての霊格は低下していく。

精霊の加護 : B

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。ただし彼の場合、森や林などの、人の手があまり加えられていない自然が残っている場所で戦う場合にのみに限定される。

千里眼：C +

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。 + 判定の  
為、限定的な物体透視能力を有する。

CLASS : キャスター

マスター：衛宮 時雨

真名：??

性別：女性

宝具：??

武器：神宝八野鎮石

ステータス：筋力：E 耐久：E 敏捷：C 魔力：A + 幸運：

B 宝具：??

「クラス別スキル」

陣地作成：C

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。 が、どうも  
性格的に向いていないらしく、工房を作る事さえ難しい。 と言う  
か、ご主人様の愛の巣を作るなら頑張ります！

道具作成：E

ご主人様との濃密な営みの時間を作る為なら……きやつ！？  
もうやめてくださいご主人様

「固有スキル」

呪術：EX

ダキ二天法。地位や財産を得る法（男性用）、権力者の寵愛を  
得る法（女性用）といった、権力を得る秘術や死期を悟る法があ  
る。 しかし過去さんざん懲りたのか、あまり使いたがらない。

変化：A

借体成形とも言われる。玉藻の前と同一視される中国の千年狐

狸精の使用した法。 殷周革命（『封神演義』）期の妲己に憑依・  
変身した術だが、 過去のトラウマからか、あまり使いたがらない。



## 登場人物紹介（敵FATE側）

CLASS : アーチャー

マスター : ??

真名 : ??

性別 : 男性

宝具 : ??

武器 : ??

ステータス : 筋力？ 耐久？ 敏捷？ 魔力？ 幸運？ 宝具？

「クラス別スキル」

対魔力 : D

シングルアクション

一工程による魔術行使を無効化する。 魔力避けのアミュレット程度の対魔力。

単独行動 : ?

「固有スキル」

??

「情報」

赤い外套を纏う弓の騎士。その正体はほとんど不明。螺旋剣を矢として使用したり、見慣れない白と黒の中華風の剣を使う謎の英雄。

CLASS : キャスター

マスター：??

真名：ナーサリライム？

性別：-

宝具：永久機関・少女帝国

ステータス：筋力：E 耐久：E 敏捷：E 魔力：D 幸運：A

宝具：A+

「クラス別スキル」

陣地作成：A

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

“工房”を上回る“神殿”を形成することが可能。

道具作成：E-

魔術的な道具を作成する技能だが、このキャスターはほぼ使えない。

「固有スキル」

変化：E

私は見つけた。ワタシは見つけた。

アナタは私で、あなたはワタシ。

さあ、これで私は<sup>わたし</sup>大丈夫。

自己改造：E

自身の肉体にまったく別の肉体を付属・融合させる適性。

このランクが上がればあがるほど正純の英雄から遠ざかっていく。

そう、わたしはワタシになっただけ。

魔術：C

オードソックスな魔術を習得。

詳細は不明

まじゅつつて何？

名無しの森：A

魔術の最高峰。到達点とされる固有結界の一種。対象の自我や記憶、更には存在の忘却を引き起こし、その果てには全てを虚空の彼方に失った者を消滅させる。対魔力が高ければ高いほど忘却する時間を延長できる。

## 第一話

虚ろな意識がゆっくりと浮上する。

漆黒から光へ。僕はゆっくりと目を開けて

困惑した。

「戯言を抜かす出ない！ この者は余の奏者だ！！」

「この方は私のご主人様なんです！！」

霞がかかっていた意識は強制的に覚醒した。

目の前で二人の少女が言い争っている。

一人は赤いドレスに髪を丁寧に結い上げた少女。もう一人は和服に狐耳と尻尾が生えた少女。二人はぎりぎり歯軋りさせて、血走った目でお互いを睨み付けている。

なに……一体これは何なのでしょう？

一先ず睨み合う少女達から視線を外し、周囲を観察した。

自分とは変なベッドの上に寝ていて、周りには大量のコンテナが積みまれている。倉庫なのだろうか？ いや、天井を見上げると大穴が開いていて景色が流れている。もしかして列車の中なのだろうか。

ぱちつと電気が飛んだ音がした。音がした方向を見ると、円柱形のロボット……みたいなのが複数転がっていた。壊れているようだ。真つ二つにされたり、黒焦げになっている。

「もう許せん！ これ以上諫言を申すなら、もう余は容赦せんぞ！ 本性を現せ化生がぁ！」

「あーあ、言っちゃいましたね？ それはこちらのセリフです。さあ、どんな死に様をお望みですか？ 焼死、凍死、斬死、お好きなのをお選びくださいませ！」

赤いドレスの少女が赤い長剣を構え、狐耳が生えた少女は文字の書かれた長方形の紙 呪符だろうか、それをばつと広げ、互いに臨戦態勢を取った。

同時に周囲を押し潰さんとする重圧がのしかかり、息苦しくなった。

違う。

この二人、外見こそ人間の形を取っているが人間じゃない。

その内に秘められた膨大な滾り。この二人がぶつかれば周りが主に自分がただでは済まない様な気がする。

絶対凍土のように冷たくぶつかり合う敵意と、活火山の様に噴火すればありとあらゆるものを燃やし尽す圧倒的魔力。

生唾を飲み込み、僕は決断する。

うん。これは夢だ。

現実逃避することにした。

ああ、やだやだ早く起きよう。早く起きて。

ははっと笑いを浮かべていた口元が凍りつき、思考が停止した。

起きて、その後はどうなるのだ。

いや、それ以前に僕は何者なのだ？

僕はどこの誰でどこに住んでいた？

何故、こんなところにいるんだ？

分からない。分カラナイ。分カラナイ。

思い出セナイ思い出セナイオモイダセナイ。

「あつ - ？」

知らず知らずの内に自分の肩を抱いた。

言い様のない恐怖が、全身を駆け回った。

自分が何者なのか、いや、それ以前に何なのか不安になった。

積み重ねてきたモノがその存在を、人格を構成する。赤ん坊は別。それを理解する知恵がない。だが、今の自分はその知恵が理解できる。

- - - 恐ろしい。自分と言う唯一確かな定規を失っている。

「あつ……ああつ……!？」

「奏者!？」

「ご主人様!？」

震えてきた。怖い。言い様もなく怖い。

「奏者よ。しっかりせぬか！ ええい。この駄狐！ そなた、キヤスターであろう。何とかせぬか!？」

「駄狐言つなあー!! ご主人様、まずは気をお静めください!」

……きやすたー……？

あれ、どこかで聞いた覚えがある。

どこで聞いたのだろうか。この呼び名だけ、記憶のない自分が記憶していたと覚えている気がする。

顔を上げる。

不安げに泣きそうな二人の少女の顔。

狐耳の少女がキヤスター……？ じゃあ、こっちの子は……。

「せい……ばー……?」

自然と言葉が漏れた。

赤いドレスの少女の顔が、驚きとそして喜びの表情へと変わった。目に涙も浮かんでいる。

ああ、何かすごく可愛いなと、心の角で呟く。

「奏者よ?! 余に覚えがあるのか。覚えておるのか!?!」

今度は視線を狐耳の少女へ向け、再び確かめるように僕は呟く。

「き、みは……たしか、きゃす、たー……だよね?」

「ご主人様!?!」

狐耳の少女も、赤いドレスの少女と同じく、驚き、そしてぼろりと涙を流し、嬉しそうに顔をゆがめた。

ああ、この子も可愛いなあ……なんて明らかに場違いっぽい言葉を呟き、僕の意識は再び闇に落ちた。

「……これは一体どういうことなのだ?」

と赤いドレスの少女、セイバーは共にマスターだった少年の体を支えるキャスターに尋ねた。



「まったく持つて分かりませんね。今の言葉を察するに、私達お互いの事をご主人様は知っているようでした」

狐耳の少女、キャスターは氣を失ったマスターの顔をじっと見つめつつ、考える。

おかしい。これはまったくもっておかしい。

あの戦いを、あの激戦を共に駆け抜けたのは、この少年のデータを基にした複製品であるため、オリジナルであるこの少年が覚えていないはずはない。そして一番不可解なのは、何故お互いのクラス名を呟けたのか……。

「……セイバー。ここは一時休戦しませんか？」

「……よからう。その提案受け入れよう。お前の事より、余は奏者の体のほうが気になる」

お互いはお互いを見ず、静かに約束する。

「それでこれからどうするのだ？」

「まずは現状把握が最優先でしょうね。あの地下研究所の崩落から、何でこんな場所にいるのか。そしてあの無粋なエネミーは何なのか、そして」

二人の視線が貨物室の入り口へ。

同時に、ツインテールに銃らしきモノを構えた少女が入ってきた。

「動かないでください！ 時空管理局です！」

「あやつが何者であるか……だな？」

セイバーはため息交じりに答えた。

「それにしても、ずいぶんと奇天烈な格好と言つか、派手じゃな。あんな礼装はあったか？」

「それを言うなら、あなたもそうですけど。……一応、魔力で作られている服みたいですねー。魔力は……んー、人間にしちゃ多いほうですかね？」

「貴方達一体どうやってここに来たんですか！？ ここは犯罪現場です。申し訳ありませんが、身元を特定できない以上、拘束させていただきます！」

「……とか言ってますけど、このツインテールは……。と言つか、聖杯のバックアップを受けている私達に対して、魔術師が单身立ち向かうなんて……この子、バカなんじゃないですか？」

少女の牽制の声を、キャスターは軽く流し、やれやれと肩をすくめた。

「なっ！？」

「ふむ……絶対的強者に対して立ち向かう弱者の姿。その姿は滑稽だが、美しいものがある。……少し愛でたい気持ちだが、今は奏者のほうが重要だ。ここを出て、休める場所を探すのが懸命ではないか？」

「ですねー。それじゃあおっぱいが小さそうなツインテールさん。お邪魔しました。どうぞお仕事を続けてくださいな」

「なっ……なっ……なっ……!!」

思わず胸を抑え、顔を真っ赤にする謎の少女。

「して、奏者は余が担ごう」

「あっ、何やっているんですか？ 脳筋、肉体労働担当のセイバーさんにはこういう繊細いな、かつ愛情が大切なお勤めは出来ません。ですので、ご主人様は私が背負います」

「おっ、奏者よ。なかなか良い体つきよな……むむっ、侮っていた」

「あっ、うわ胸板意外と厚い……鍛えなおせば細くて身が引き締まったご主人様が、私を抱きしめて      きゃあー、タマモ、困りますうー！ 狐的にはもちろん後ろからでえ、それでそれで……」

「だ、誰があ……」

「「んっ？」」

「誰が、胸が小さいツインテールよおおー……!!」

時空管理局遺失物管理部、通称「機動六課」スターズチーム、ティアナ・ランスターは怒りに任せて魔力弾を連続発射した。

「ふむ。実に優雅さがないのお……」

「今の魔術でしょうか？ 変ですねー、地上はマナが枯渇して、神秘は起こせないはずなんです……」

すたつと先ほど謎の円柱型のエネミーを撃破した時に開けた穴から、高速で走行する貨物列車の屋根に着地したセイバーとキャスターは、しみじみと呟いた。二人の間には、白いガウンを纏ったマスターだった少年が担がれている。

「……まあ、そんなことはどうでもいいっか。ところでここはどこなのでしょう？」

きよろきよろと周りを見渡した。右側は絶壁の壁。左側は深い断崖。そしてその下には川が流れている。

「ふむ。見た事ないな。そなたはどうだ」

「セイバーさんに同じく」

「……さすがに、奏者を背負ってこの速度から飛び降りるのはちと危険だな。仕方がない。列車を止めるか」

「頑張ってくださいまし。私はここでご主人様をお守りしていま

すから」

「なっ?! ふざけるでない?! そんな事させると思つか!？」

「じゃあどうするんですか? このまま、この冷たい風の中、ご主人様を放置すると……ああっ!? なんて可哀想なご主人様!? セイバーさんが行動しなかった為に、ご主人様の目覚めたばかりの体を冷えていくばかり……よよっ……」

どこから取り出したのか、キャスターが白いハンカチで目元を拭く。

セイバーはうつと言葉を漏らし、しびるマスターから離れ、剣を構えた。

キャスターにマスターを預けておくのは凄まじく不安だが、マスターの体を事を考えればそれもやむ終えない。

セイバーはずっと剣先をキャスターに向けた。

「何を ひっ?!」

「よいか……。もし先ほどの約定を違えたり、余が戻るまでここにいなかったら、余は地の果てまでそなたを追いつけ、余が考え付く全ての死をそなたに与えてやる。死んでも殺し、肉の欠片となっても止めぬ。良いな、必ずここにいよ」

もう何か黒いオーラを纏って、笑っていない笑顔で物凄い威圧を発するセイバー。キャスターは涙目になりつつ、こくこくと頷いた。

「……よかるう。では、行つて来る」

サーヴァントの身体能力は人間の比ではない。彼の騎士王には及ばないものの、それでも彼女の身体能力は凄まじく、一足で次の車両の中間地点まで跳躍した。

「……あー、怖かった。セイバーさん、ダークサイドに墜ちると恐ろしそうですねえ。でも、まあ……」

むふつと顔を緩ませ、抱きしめるマスターを見つめた。

「ああ。ご主人様。何と麗しきお顔　もうこれは私、食べちゃつても　「見つけたわよ！」　ちっ」

振り返る。そこには怒髪天突く勢いで怒るティアナと、見慣れないハチマキを巻いたショートカットの少女がいた。

「あなた達を重要参考人として拘束します！　スバル、油断しちやだめよ！」

「あ、もう！　どうして私とご主人様の愛の時間を邪魔するんでしょうかね。このタツインテルと……腹だしハチマキ娘は。と言つか品がないですよ。もしかしてIN-RANなんですか？」

「ひどっ?!　結構気に入っているのにいっ!　それに貴方も同じような服じゃないですよ!?　その服なんですか?!　あなたこそ変態じゃないんですか!？」

と、ティアナと同じ部隊に所属するスバル・ナカジマが吠えた。

その瞬間、キャスターの顔から表情が消え、次につこりと笑顔を浮かべた。

「決めました。貴方達、もう髪の毛一片も残しません」

ふつと、キャスターの周囲に何かが出現した。鏡だ。彼女の武器、神宝の中の神宝、玉藻鎮石<sup>たまもしずいし</sup>。

「ご主人様。少しお寒いかもしれませんが、お許しくださいね」

ゆつくりと横たわせ、その上に呪符を一枚置く。

呪相・密天を発動させる為の呪符を利用して、彼の周囲の気流を操作しておく。

「お待たせしました」

につこりと、男なら思わずくらくとくる極上の笑顔を浮かべるキャスターだが、何故か、ティアナとスバルが背筋が寒くなった。

よく分からないが、何か自分達は地雷を踏んでしまったらしいと。

「さてお二方、僭越ながら黄泉比良坂へご案内して差し上げましよう」

ティアナとスバルは直感した。

ああ、あれが殺す笑みなんだ、と。

「な、何なんあれ……」

「機動六課」部隊長八神はやては、目の前に投影されている大型空間モニターを見つめ、茫然と呟いた。

列車の上に繰り広げられている光景。それははやてが想像もした事のない光景だった。

炎が渦巻き幾つもの爆発を起こし、屋根は氷漬けにして、烈風が岩だろうが鉄板だろうが、ありとあらゆるモノを切り裂いていく。

百年分くらいの自然災害が集中している空間の中で、六課の期待の新人二人が、涙目で逃げ回っている。

そしてその光景を映し出しているサーチャーの、集音マイクから聞こえる実に喜悦に満ちた声。

『そろそろ逃げなさい。逃げないと燃えて凍ってバラバラになっちゃいますよー』『ようやく出会えたご主人様との時間を奪った罪、万死に値します』『というかもう死ね』

「な、何ですかあれは……あんな魔法ありましたか？」



隣に立つ副官グリフィス・ローランもあんどりと口を開けて、映像を見つめていた。

「や、八神部隊長……」

シャリオ・フリーノが引きつった顔で振り返る。

「あ、あのキツネ耳を付けた女性なんですけど……魔力計測値は凄い事になってるんですけど……」

「ど、どのくらいや？」

「軽く……S以上かと……」

S……？ 軽く……？

静まり返るロングアーチ。

「た、高町一等空尉とテストロッサ執務官に現場に急行するように連絡を……」

はやての焦った声でロングアーチはにわかに再起動した。

「邪魔だ。木偶が」

屋根の下、貨物の中から出てくる円柱型のロボット　ガジ  
エットを一撃の元に粉碎していくセイバー。

剣戟を纏う滑走。赤い軌跡が宙を描く度、それをさらに彩る様に  
爆発音が響く。

「他愛もない。奏者と駆けたあの海のほうがまだ齒こたえがある  
ぞ」

迫る触手を切り抜け、通り抜け際に斬り捨てる。

と、不意に何かの気配を感じ、足を止めた。崖の方に視線を向け  
ると、その正体は直ぐに現れた。

「おおつ、なんと!？」

彼女は満面の笑みでそれを見上げた。

崖の下から現れたソレは、彼女の時代にも存在していなかった架  
空の生物。神話の時代において最強と謳われ、全ての幻想種達の頂  
点に立つ存在。

竜。

しかも白銀の龍。

セイバーの眼が子どもの様に燦々と輝いた。

「うむ。何と雄々しく雄大な翼と体躯である事が……！　ううむ  
……絵にしたいが、キャンパスと筆がないな」

その時、残ったガジェットの手が伸びるが、あまりにも直線的な動き。セイバーは攻撃をほとんど見ずひらりとかわし、倒れこむように接近し両断した。

「なんと無粋な奴らだな。まあ、仕方ないか。そんな知能があるとは思えぬし……ん？」

と、隣の車両から丸型の少し大きなガジェットが触手を使って這い出ようとしていた。

「ほう。少しは齒ごたえがありそうな奴が出てきたな……ちようどよい雑魚ばかりで鬱憤が溜まっていたところだ」

愛剣、韻鉄の韜「アエストゥス・エストゥス原初の火」を振り上げ、構える。距離にして約十五メートル。セイバーにとってさしたる距離ではない。

「ロサ・イクトゥス（花散る天幕）！」

まさに紅の一閃。

一足で踏み込み、三型ガジェットも一撃で両断した。

切払いの状態で止まり、背後から爆発音と爆風がセイバーのドレスを揺らす。

「……つまらん。こいつも一撃か」

むすつとした顔で呟くセイバー。

元より当然の話である。英霊とただの機械。何処に負ける要素があるのか。

「まあ、良いか。余の無聊を慰めてくれるモノもある事だしな」  
空を見上げる。

そこには白銀の龍と、その背に乗った少年、少女。

（むっ……美少年、美少女の原石……！）

きらりと眼を輝かせ、セイバーは満足げに頷いた。

「  
弾かれた？」

「どうしたマスター？」

「分からない……突然、弾かれてしまった……」

「ふむ。それはまた妙な話だ。アレに干渉できるのは君だけの筈

だろう？」

「その筈だけど……ちょっと調べてみる」

「私にできる事はないか？」

「……アーチャー」

「何だマスター？」

「美味しい紅茶をお願いします」

「……ふっ、了解したマスター」

## 第一話（後書き）

もう一つのほうが全く進んでいないのに、投稿してしまいました。  
出来る限り、並行して進めようと思いますのでよろしくお願いしま  
す。

## 第二話（前書き）

意外と早く書きあげられました。

セイバーとキャス狐がとも書きやすくて……。

次ぐらいでなのはキャラが本格登場の予定です。

## 第二話

虚ろな意識がゆっくりと浮上する。

漆黒から光へ。僕はゆっくりと目を開けて  
□元を引きつ  
らせた。

「ふにやほにや、になあああ!」

「にやにいいきぎいい!」

ベッドで横たわっている僕の目の前で、赤いドレスの少女とキツネ耳を付けた少女がお互いのほっぺを摘まんで、争っていた。

……何、今度は一体なんなのでしょう。

目覚めた僕は完璧無視で、二人の少女はさらに強くほっぺを摘み、引っ張り合う。眼に涙を浮かべてかなり痛そうだが、お互いの対抗心からか、手を緩めようとしない。

「ふによれー! ひよのてをはによせえー!」

「あふによたのひようこひょー!」

……あー。僕はまだ夢を見ているだな。寝よう寝よう。

と、眼を閉じようとした矢先、ういんと自動ドアが開くような音がした。



「ちよつ……？！ セイバーちゃん、キャスターちゃん、何をしているの？！」

入ってきたのは白衣を着た金髪の女性だ。温和そうな顔立ちで、暖かな春の風のように優しく包み込んでくれるような印象を受けた。

白衣の女性は赤いドレスの少女　確か、セイバーだったかな。セイバーをはがいにじめにして、キツネ耳の少女、キャスターから離れた。

「ええい。離せシャマル！ オリュンポス十二神が許そうとも、この駄狐生かしてはおかぬ！ その場になおれええー！ー！！」

いつの間にか、セイバーの手にはあの赤い長剣が握られていて、ぶんぶん振り回している。セイバー、それ、本当に危ないから。

「ぶぶつ……出来るものならやってみてくださいな。わたし……本気でしたら凄いですよ？」

「キャスターちゃんも火に油を注がない！　誰か来てええー！！！！」

セイバーの力を抑えきれなくなっているのか、シャマルと呼ばれた先生が泣き顔で叫ぶ。

……カオスだ。実にカオスだ。うん。関わらないほうがいいよね。

現実逃避決定。寝たふりを実行。

「あつ、ご主人様。お目覚めになりましたか!？」

と、不敵に笑みを浮かべ、鋭い目つきを浮かべていたキャスターが、ボクを見た途端、物凄い可愛い笑顔で近づき、首に抱きついてきた。

うわっ、良い匂い。それに凄く柔らかい……。それに犬みたいに尻尾が左右に揺れている。あれ、本物……？

「ああああー！ー！ このINN-RAN駄狐！！ 余の奏者に抱きつくな。それが許されるのは……その、あの……ええい、離れぬかあー！ー！！」

「シグナムー！ なのはちゃん！ フェイトちゃん！ 誰でもいいから来てええ！ー！！」

しばらくして三人の女性が医務室に流れ込んで来て、局地的な大災害に見舞われた。

その余波で、僕はベッドから投げ出されて、飛んだり叩きだされたり抱き締められたり引っぱられたりして、死んだと思ったが……まあ、何とか生き残った。自分の体が意外と頑丈な事に感謝した。

「うわあ……何があつたんこれ？」

遅れて、もう一人の女性が口元を引きつらせて医務室に入ってきた。

いや、ここは医務室と言えるだろうか。竜巻に見舞われた後の町のような残骸の部屋。シヤマル先生が部屋の隅で「私のお城がぁー……」と泣きながら、医療機器の残骸を抱きしめていた。

「主はやて。実は……」

と、ピンク色の髪のポニーテールの女性が僕を見る。

綺麗できりつとした女性だ。纏っている服に剣を持っているから、女騎士と言っ言葉が実に似あう。

「ああー……説明しなくてもええわ。何となくやけど分かったから」

頭を押さえながら、女性が呟く。

「それにしても羨ましいな。両手に花、やとは……」

そう、彼女の言うとおり、僕は今、男が一度は憧れる状態にある。右手にセイバー。左手にキャスターが僕の腕を抱きしめている。

両腕に感じる豊かな女性の象徴。普通ならどきつとする状態だろうけど、今はそんな気、微塵もない。

「……」

「……」

お互い、視線で殺せるぐらいの鋭い目つきと威圧を発しているから。正直、生きている心地がしない……。

誰か助けてえー……。

「キャストー。命令だ。一度しか言わぬ。余の奏者から手を放せ」

「お断りいたします。それに誰が貴方のマスターだと言いましたか？ 貴方こそ、その汚らし手と……ぷっ……な胸を離してくださいまし」

ぷっ、ってキャストー。その……キャストーと比べると確かに小さいと思うけど、一般的にみるとセイバーもかなり大きいと思いますよはい。

「ほう……」

みしりつと空間が歪み、ばちつと、火花が散るような音がした。

何か凄く体が重い。それにゴゴゴゴッ……って言う音も聞こえる気がする。

よく見れば、サイドテールに白い服を着た女性も、金髪ツインテールに黒い服を着た女性も女騎士も、シャルル先生も後から入ってきた女性は、かなり口元を引きつらせて、一歩、二歩と下がっている。

ああ……助けて。助けてくださあーいー！

眼で訴えるが、サイドテールの女性と後から入ってきた女性は眼を反らし、金髪ツインテールの女性は申し訳なさそうに視線をずらす。女騎士は我関せずと言った感じで眼を閉じて、シャル先生は「サアオソウジシナクチャ」と呟きながら、掃除箱をあさっている。

画して、第二次局地的な大災害が勃発したのは言うまでもない。

「と、言う事なんや」

時空管理局遺失物管理部、通称「機動六課」の部隊長八神はやてさんはこの世界の説明を、そう言って締めくくった。

ちなみに僕の両隣りには無傷のセイバーとキャスターがつーんとした顔で、お互いを見ないように部隊長室のソファアに座っている。ちゃっかり僕の両腕は掴みながら。

対して正面。八神さん、それに右隣に座る高町なのはさん、左隣に座るフェイト・テスタロッサ・ハラオウンさんが座っていて、三人とも少しボロボロになって、髪が乱れている。

第二次局地的な大災害は、第一次の比ではなかった。二人とも完全に殺る気満々で戦い、セイバーの剣がありとあらゆるモノを切り裂き、キャスターの呪符がありとあらゆるモノを破壊する。

高町さん、テストロツサさん、はやてさん、それにあの女騎士シグナムさんが止めようとしたただけで、いつの間にかセイバーとキヤスターの矛先が四人に向いて、さらに激化。正直、こうして生きているのが不思議な、凄惨過ぎる激闘だった。ちなみに、医務室周辺は灰塵と帰り、シヤマル先生は泣き崩れ、八神さんは「新設の隊舎が……ウチの努力が……予算はないんやでえ……」と夢遊病者のような感じで茫然と呟いていた。

「はあ……何か凄い世界ですね」

八神さんの説明を聞いて最初に出た言葉はそれだった。

次元世界。魔法。司法と立法の混成機関時空管理局……正直、過去の記憶がおぼろげな僕にしては、特に違和感なく受け入れられた。

「へえ……」

と、八神さんが興味深げに僕を見つめている。

「何か？」

「いや、普通なら困惑するか、元の世界に戻せえーとか言うんやけど、随分とあっさり受け入れたもんやな、と違って」

「ああ。その……僕、記憶喪失みたいで。正直、自分がいた世界に関してもおぼろげなんです。だからこう……空いている穴に流れ込む水みたいに、あっさり受け入れられたって言うか……」

「えっ……それはちょっと大変だね」

と、テストロッサさんが考え込むように呟いた。

「そうだね……。次元漂流者を元の世界に戻す手掛かりは、その人の記憶が一番重要な手掛かりだしね。となると、世界の記録から探すしかない。凄い時間がかかるね」

説明するように、高町さんが付け加えた。

まあ、正直別に元の世界に戻らなくてもいいかな、とか思っている。

戻ったところで過去の記憶がない以上、そこは僕にとって元の世界ではなく、この世界と同じく新世界に見えてしまう。

「まあ、しばらくはウチで保護するのは決まっているし……。それよりも衛宮さん、そのセイバーさんとキャスターさん、一体何者なん？」

不意に八神さんの眼が鋭くなった。

あつ、衛宮って僕の名字。

衛宮　時雨。名前だけはどうにか覚えていたようだ。

「列車の時と言い、さっきの医務室の件と言い、正直、セイバーさんとキャスターさんは魔導師とは思えへん。シグナムとは真つ向から打ち合うわ、なのはちゃんのショートバスターをあつさり跳ね返すわ、フェイトちゃんの斬撃をひよいとかわすわ、二人とも化け物じみた魔力を持っているわ……。一体何者なん？」

何者なん……と言われても、僕も正直よく分からない。

でも、何故だろうか。この二人は知らないようでよく知っている。なんか、二人が隣に居るのが当たり前のように感じる。

「余はサーヴァントだ。その駄狐もな」

僕の疑問に答える様に、セイバーが言った。

サーヴァント……？ あれ、何か聞き覚えがある様な……。

「サーヴァント？ 使い魔？」

首をかしげるテストロツサさん。

「そんな低俗なモノと比べられるのは心外ですねー。サーヴァントとは英霊です。生前、偉大な功績を上げた英雄が死後、「英霊の座」と呼ばれる高次の場所に迎えられ、信仰の対象となった者達。と、説明してもたぶん分からないでしょうから、簡単に言いますと人間程度なら逆立ちして回って踊っても到底、勝つことのできない、一段階上の存在です。まあ、私も本気を出せば、この世界すべてを敵に回しても勝つ自信はありますが」

うん。出来るだろうな。キャスターは。何せ彼女はあの の前だ。サーヴァントではなく、悪霊として召喚されれば百の英雄相手でも彼女には勝てないだろうなー。

……あれ、今、僕、何を……？

「つまり……なんや。セイバーさんとキャスターさんは過去に存



在した歴史上の人物なんか？」

「そうだ。真名は教えられるが、余はかつてとある帝国の王であつた」

セイバーはえっへんと胸を張って自慢げに言った。

……うん。暴君とも言われていたけど、彼女が行った政策の数々は、後世の歴史家が絶賛するぐらいの素晴らしいものだったし、それに醜悪な最期なんて言っていたけど、  
は自分の生涯を後悔していないもんな。

……まだだ。何で僕は……？

「ご主人様。どうかなさいましたか？」

キャスターが僕の顔をのぞいてくる。眼を見れば分かる。本当に心配してくれている目だ。

「いや、大丈夫。ありがとうキャスター」

薄く笑みを浮かべて言うとキャスターは、じつと僕の瞳を見つめにこりつと笑って元の位置に戻った。

「……なるほど。にわかには信じられへんし、突っ込み所も一杯あるけど、今はまあええわ。それじゃあ次の質問、何で貨物列車の中にいたん？」

あつ、それは僕も知りたい。

「分からぬ」

セイバーは簡潔に答えを口にした。

「分らないって、どういうこと？」

「余にも分からぬのだ奏者よ。覚えておるのは、そなたの入ったポッドを見つけた時、崩落が起こってな。奏者を守るために我が身を盾にして、気がついたらあそこにおった」

「私も同じですね。ようやくご主人様を見つけて天井が崩れて、そして気がついたら、とつても赤いお邪魔虫がいて、今に至ります」

口元を軽く引きつらせた。セイバーの言うとおり、何にも分らない。結果ははっきりしているのに過程がさっぱり不明。なんとも難儀な状況だ。

「まっ、どうでもいいじゃないですかご主人様。こんな些細な問題、ぽいしちゃいましょう」

るるんと言った感じでキャスターが言った。

いや、ぽいって……と言うかどうでもいい問題じゃないだろう。

僕はともかく、セイバーとキャスターには自分の世界がある。不安じゃないのか？

僕はキャスターにその事を伝えようと、キャスターは「はえ？」ときょとんした顔を浮かべた。

「いや、だってここは見た事もない世界なんだよ？ 自分の世界でもない。キャスターは不安じゃないの？」

「不安じゃありませんよ。だって、私のいるべき世界はご主人様がいらっしゃる世界だけですから」

当然の如く、キャスターは言い放った。

つまり……それはどういう意味なんだ？ 何か、キャスターは僕さえいれば他はともでいいのか？

「だって私、ご主人様絶対主義、良妻狐ですから」

ぎゅっと嬉しげに腕に絡み付いてきた。キャスターの心を表現するように尻尾がふりふり揺れている。

何か、すごく嬉しい。こんな確かな自分を持ってない自分を大切にと言ってくれるキャスターの言葉が。

心が温かくなる。口元には自然と笑みがこぼれた。

と。

「……」

くいくいつと反対側の服のすそが引つ張られた。

振り返ると、セイバーが泣きそうな目でこっちをじっと見ていた。

……うわぁ、なにこれ。めちゃくちゃ可愛いんですけど……！？

「奏者よ……」

蚊の呟くような声で、セイバーは言った。

「な、なに？」

「余も……奏者が一番大切……なんだぞ……」

顔を真っ赤にして、俯いていく顔。小さくなっていく言葉。

……ぐはっ?! やられた。問答無用でやられました

!!

「あ、ありがとう。わ、分かっているよセイバー」

何とか言葉を紡ぐ。

それを聞いたセイバーの顔は照れくさそうに、それでいて恥ずかしげに腕をぎゅっと掴み、指を絡めてきた。

ぎゃあああー!! 何かもうよく分かりませんー!!

「ら、ラブラブだね……」

と、テストロツサさんが顔を赤くして、こちらをちらちら見ている。

「……うん。ラブラブだね」

高町さんも同じような顔で呟く。

「……けっ。ウチの隊舎を破壊して、その上このラブコメかいな。はっ、やってられんわー」

どかつとソファアに背中を預け、実に面倒臭そうに忌々しい顔を浮かべる八神さん。もし、煙草があればぷかーと吹かしているだろうな。

「あっ……はははっ……」

笑ってごまかそうとしたが、たぶん無理だろう。しかし、僕にはそれしか出来ないの、しばらく笑い続けた。

結果的に言えば、僕とセイバー、キャスターはこの「機動六課」に協力する事になった。八神さんはセイバーとキャスターの力を貸して欲しく、生活全ての面倒を見る代わりに、何かあれば協力して欲しいとの事だった。

僕としては願ってもない話だった。医務室周辺を灰燼にした責任の一旦は、たぶん僕にある。セイバーとキャスターは八神さんからの申し出を最初難色を示し、実に面倒臭そうな顔を浮かべていたが、僕が頼むと一言返事で了承した。

それを見た八神さんは「はいはい。羨ましいな衛宮さんはー」と、投げやりの言葉を漏らし「……羨ましくないやい。別にわたしは……」とか呟いていた気がした。

そして今、僕は八神さんに用意してもらった部屋の一室にいる。キャスターが僕とセイバーに話があるそうだ。

「ご主人様。確認いたしますが、私達のクラス名の他、覚えている事がありますか？」

と、ベッドの上で正座して、神妙な顔で尋ねてきたキャスター。

にこにこ、うきうき顔ばかり見てきた僕としては、キャスターのもう一つの一面を見た気持ちだ。

「ううん。何も……」

「そうですか……むむ……」

「キャスター。何を考えておる。さつさと申せ」

備え付けられた椅子に座って尋ねるセイバー。

「結論を急がないでくださいね。これだから脳筋さんは……いいですか？ 私とセイバーさんはお互いに、ご主人様のサーヴァントとして聖杯戦争に勝利し、ご主人様の願いを聞き入れ、地上へと降りた。ここまでは間違いないですよね？」

「違うない。昨日、確認したであろっ？」

「はい。ですが、それはありえない事です。原則としてマスター一人につき、サーヴァントは一人。ですが、ここには目の前のご主人様をマスターとした確かな記憶が私達にはある。矛盾が発生しています」

うん。その通りだ。

キャスターの言っている事の半分は意味不明だけど、マスターって言うのが自分だったって言うのは分かる。そしてサーヴァントって言うのが傍にいた。だけど、サーヴァントは一人しかない。なのに、二人には僕のサーヴァントであつた記憶がある。

「うむ。そこがよく分かんが、余が奏者と駆けたのは確かだ」

「ええ。セイバーさんの記憶は疑っていません。とうぜん、私の記憶もです。そこで私はある仮説を立てました」

ぴんつと指を立てる。

「私とセイバーさん、どちらかはおそらく並行世界のご主人様に使えたサーヴァントであると思います」

並行世界？ それってSF小説とかで出てくるもう一つの世界の事？

「……ふむ。あり得ぬ話ではないな。現存する五つの魔法の一つに並行世界の運営があつたはずだ。今はどうなっておるか知らんがな」

「魔法？　僕がいた世界にも魔法があつたの？」

「あるにはありましたが、この世界の魔法とはまったく違う次元ですね。まあ、そのあたりのお話はまた今度に致します。

私達に置かれた状況はさして問題ではないんですが、ご主人様には二つの問題があります。仮に目の前のご主人様が　　と言いか

確定ですけど

私のご主人様ならば、”なぜ、ご主人様はセイバーさんのクラス名を呟けたのでしょうか？”　少なくとも私と

ご主人様と戦った聖杯戦争において、セイバーさんは見た事ありません」

「……むうつ……色々訂正したいところもあるが、余もそうだ。余はお主のようなキヤスターは知らぬ」

セイバーも顎に手を当てて考え込む。

むつ、何かややこしい話になってきたな。

「さらにもう一つ。あの聖杯戦争にいたご主人様は、地上の、ここにいるご主人様のデータを利用した複製品です。なので本来、私達のクラス名を呟けるはずありません」

「……ますます分からぬな」

悩む二人。

僕はそれを他人事のように見つめた。正直、ぜんぜん話が分からないが、どうやら僕のコピーが彼女達のどちらかと聖杯戦争と言う戦いを勝ち抜いたらしい。そしてその僕のコピーの記憶の欠片が、オリジナルの僕にダウンロードされていると言う、あり得ない自体



になっている。

…………… まあ、よく分かんないから放置。決定。

「あのさ」

と、僕が声を掛けると二人の視線が集中した。

「何かよく分かんないけど、その、僕はこうして生きている。今は、それでいいんじゃないかな？」

「そうだな。これを良しと判断しよう」

「はい。むしろ、少しでも私の事を覚えていらっしやっ  
た事を僥倖と判断します。と言うか、これもご主人様と私が起こし  
た愛の奇跡……んきゃああー、言っちゃったあー!!」

ふりふり、くねくねと体をくねらせるキャスター。

「この駄狐……奏者よ。狐の毛皮が欲しくないか？」

ちゃきつと剣を召喚し、構えるセイバー。

この二人、仲悪そうなんだけど、実は仲良しっぽいんだよな。あの医務室の件でも、殺る気満々でやっていたとは言え、どこかで手を抜いていた感があるし。

ともあれ、このまま放置していれば第三次局地的自然災害が発生し、八神さんが涙を流す結果になってしまう。

そこで僕は八神さんから落し物だといわれたアレを出す事にした。

「ところでさ二人とも、このカード、なんだろうね？」

と、ポケットから七枚のカードを出して、扇状に広げた。

古めかしい絵が描かれた七枚のカード。その絵を象徴するように、下に名前が刻まれている。

セイバー。

ランサー。

アーチャー。

ライダー。

キャスター。

アサシン。

バーサーカー。

「明らかに聖杯戦争におけるクラス名に模したカードですよね？」

お花畑の世界から戻ってきたキャスターが、ぴよんとベッドの上で飛び降りる。そしていぶかしげに自らのクラス名であるキャスターのカードを手を取った。

「ふむ。間違いないな」

そしてセイバーは、セイバーのカードを手を取った。

その瞬間、両手の甲に熱い痛みが走り、残った五枚のカードを床に散らばった。

「つつ　　えっ?!」

両手の甲を見る。そこにはなぜか見慣れたと感じてしまう、赤い刻印が刻まれていた。

「これは……令呪だと!?!」

「あつ……この感じ……ご主人様とのパスが繋がった……?!  
でも、どうして……?」

二人が驚いた様子で僕の両手に刻まれた刻印を見る。と、二人が持っていたカードも掻き消えるように消えていく。

何だ。今度は何が起こって　　。

と、両手の甲を見つめていると、床に散らばった五枚のカードの一枚、「アーチャー」のカードが輝きだす。

そしてカードが消えると同時に、今度は右肩に焼き鏝を当てられたような痛みが走り、

「　　へえ。今度のマスターはアンタか?」

声のした方向に視線を飛ばす。

そこには緑のマントを羽織った軽そうな男が立っていた。

「「あつ……」」

セイバーとキャスターが目を丸くして、その男を指差し、

「何故貴様がここに居るのだ緑茶ー!？」

「何で哀れで惨めで消え去ったあなたが居るんですか緑茶ー!？」

「誰が緑茶ーだ!？」

異口同音で叫んだセイバー、キャスターに対して、男は大声で否定した。

――何か、また厄介ごとになりそうな予感。

現実逃避したくなる気持ちを抑え、僕はため息を吐いた。

## 第二話（後書き）

感想、お待ちしております。

### 第三話

「駄目か……」

薄暗い部屋の中に一人の女性が立っていた。足元には無数の幾何学模様で描かれた魔方陣がある。

女性の顔にあるのは困惑と疑問の色。口許に手を当てて考え込んでいる。

「やはり駄目かマスター？」

その魔方陣の外側。白髪の赤い外套を纏った青年が、腕を組みながら尋ねた。

「……うん。どうしてだろう。こんな風に一方的に「接続」が切られる上に、今度は「再接続」も出来ないなんて……」

ありえない……と言わんばかりに唸り声を漏らす。

「何らかの誤作動が起こった……とは考えられないか？」

「考えられない話じゃないけど……でも、結果には必ず原因が付き纏う。誤作動が起こったなら、起こった原因や兆候があったはずなんだけど……」

「ふむ。なかなか論理的に考えられるようになってきたな。マスターの成長に私は嬉しく思うよ。昔、王の器をもつ少年に対して、何の保証も無く『私の方が王に相応しい』と言い切ったあの時の君

が懐かしく思うよ」

小さく笑みを浮かべる白髪の男。女性も小さく笑みを浮かべた。

「……褒められちゃった、のかな」

「くっ……。それでどうするんだマスター。こちらから「接続」出来ない以上、打つ手はないぞ。さすがに私の力でもアレは無理だ」

「分かってる。もう一度ログを確認してみる」

「ふむ。それでは私はお茶の準備でもしておこうか」

背を向ける白髪の男。

「……アーチャー」

「何だマスター？」

「お茶受けは、冷蔵庫の一番奥に置いてある苺のタルトがいいな」

「……目ざといな我がマスターは」

小さな苦笑が漏れた。

「……んで、一体どういうことだよこれは？」

緑のマントを羽織った男      アーチャーはぶっきらぼうに言った。僕の両隣にはセイバーとキャスターがいて、実に嫌そうに、不満そうな顔を浮かべている。

「いや……どういうことだと言われても、僕としてはさっぱりと申しましょうか……」

「ああ？    お前がオレを呼んだんじゃねえのかよ坊主？」

「いーえ、ご主人様は緑茶なんて呼んでいません。なので、さっさとお帰りくださいやがれです」

僕が返事をする前にキャスターが言って、どこから持ってきたのだろう。どんつと、どでかいお茶漬けをアーチャーの前に出す。

言葉で言っておいて、さらに態度でも示すとは。キャスター……とことん、この人のこと嫌いなんだな。

「奏者よ。何だあの食べ物？」

セイバーが興味深げにお茶漬けを見つめる。

「お米にお茶をかけた和風の一品……でいいかな？    後、漬物とか鮭の身を解したものを乗せたりするんだ。まあ今度、食堂で食べてみるといいよ」



「なんと東洋の料理の一品か。では明日、早速注文してみるか」

ほうつとしきりにうなづくセイバー。

「てめえは少し黙ってるアイタタ狐。ばればれなんだよ。そのぶりっ娘ぶりは。いい加減本性を出しやがれつつんだ」

「これが私の本性なんですー。と言うか、あなたはこのわたしにけちよんけちよんにやられて、惨めに！ 哀れに！ 敗北したでしょう？ 負け犬に用はありません とつと消えてくださいまし」

「誰がてめえみたいな脳みそばーな化け狐にやられるかつつんだ。妄想は大概にしとけよ」

「ほ〜うつ……ならもう一度消して差し上げましょうか？」

「やってみやがれ。てめえこそ後で泣き面かくなよ？」

ばちばちと火花を散らす二人。今にも互いの得物を出しそうだ。

やばいやばいやばい！！ アーチャーがどのくらい強いサーヴァントなのかは知らないが、サーヴァントに選ばれるのは英霊である。二人が戦ったら、この部屋が悲惨な事になるのは目に見えている。

「ストップ！ ストップストップ！！ 戦闘なし戦闘なし！ また部屋を灰燼に帰すつもりかあ？！」

「ご主人様。止めないでくれないでまし。この緑いの、焼いて凍

らせて貰いて切り裂かねば気がすみません。狐的に」

「はっ、マスター。もうすぐこの駄狐とオサラバ出来るぜ。よかったな。これでアンタの将来薔薇色だぜ」

駄目だ。完璧に殺る気満々だ……！

「せ、セイバー。セイバーからもやめる様に……って、何お茶漬け食ってんだあー！」

「奏者よ。なかなか素朴な味で美味だな。奏者の言うツケモノと言うものも食してみたい」

「いやいやいやいや、今はそんな事どうでもいいから。セイバーも止めてくれ」

「嫌だ」

ぶいっとな首をそむけるセイバー。

「い、嫌って何で!?!」

「珍しくキャスターと意見が合うのだ。余はあのアーチャーは気に入らぬ。余は皇帝であり、施政者。どのような理由を持って戦っていたとしても、あやつは反逆者にすぎぬ。それに奏者よ。一番気に入らぬのは、あやつは毒矢で奏者を殺そうとした事だ。助けてやる理由はない。むしろ消えてくれたほうが良い」

惘然とした表情で言い放つセイバー。

って、アーチャーが僕を殺そうとした？　いつ？

と、自問した瞬間、頭に鈍い痛みが走り、脳裏にある光景が過った。

光の線で作られた空間。そこでうずくまる自分。腕には小さな傷。

何だこれ？

「おい、その赤いお姫様。何言っていやがる。オレは、てめえもこの駄狐も今のマスターも知らねえよ。呆けてんのか？」

アーチャーの声。セイバーががちゃんと、お茶漬けを床に置いた。

あつ、やばい。目が据わってる。

「赤いお姫様……だと？　影からこそそ撃つ事しか出来ぬ上、我が奏者の背を狙った卑怯者が……。何故、貴様のような奴が奏者のサーヴァントとして呼ばれたのかまったくもって理解出来ぬ。早々に消え失せろ」

「ははっ！？　卑怯者？　そりゃあそうだ。こっちはいつだって一人で大勢を相手にしてきたんだ！　正々堂々？　誇り？　騎士道？　バツカみてえ。んなもんで人が殺せればそりゃあ最高だ！」

一触即発の空気。

ああ、駄目だ止められない。と言うか、アーチャー、なに飛び火させてるんですかぁー！？

「頼むから三人とも仲良くしてくれ！ この部屋を破壊したら今度こそ行く当てがなくなる！ 路頭に迷うぞ！」

「安心せい。余が入れば何ら問題はない」

「ご主人様。私の呪術には男性の財を増やす術もございますし、いざとなったら私が養って差し上げます。きやつ、私って何て良妻狐」

「誰が良妻だ？ てめえと一緒になるってのは、鬱エンドまっしぐらだろうが。一度鏡見て言いやがれ勘違い駄狐」

ああ、駄目だ。この人たち一步も引く気はないみたいだ。

体にかかる重圧が増す。得物こそ構えていないが、眼は据わってる。

現実逃避したい。だが、ここは踏ん張らないと。

もし僕が現実逃避して、この三人がぶつかったらこの建物ごと吹っ飛びかねない。

「あ、あのさ。一つ聞いてもいいかな？」

この部屋の空気にそぐわない、出来るだけ明るい声で言った。話題を変える為に。

「聞いていなかった事なんだけど、三人ともこの英霊なの？ セイバーは皇帝って自分で言っているし、キャスターは服が和風だし、アーチャーは全然分らないし……」

「奏者よ。余はこやつの真名を知っている」

「私も。一度潰した相手ですからね」

「ああっ?! だからオレはてめえらとは一度も戦った事ねえよ。寝ぼけた事抜かすんじゃない。オレの真名を知っているだあ? 言えるモンなら言ってみやがれ」

「「ロビンフッド」」

二人は異口同音で同じ名前を告げた。

「んなっ?!」

セイバーとキャスターの言葉に、アーチャーは初めて表情を凍りつけた。どうやら当たりのようだ。

「ロビンフッドって……あのシャーウッドの森の義賊の?」

眼を丸くして、僕はアーチャーを見つめた。

確か、中世イングランドの義賊の名前だ。

リチャード一世、別名獅子心王が十字軍遠征を赴いている際、国を任されたジョン王の暴政に反抗した人物だったはずだ。

「……凄い。本当にあのロビンフッド? ……って、そんな凄い英雄を何で僕が召喚したんだ……。我ながらびっくり……」

じつとアーチャーに視線を向ける。その視線を受けてか、アーチャーは僕と視線を外し、頭を掻いた。

「むうつ……奏者よ。それを言うなら余の方が凄いぞ」

「同じく。まあ、こんな緑いの召喚出来て当たり前なんですよ。何せご主人様は私を召喚したぐらいなんですから」

セイバーはそんな僕が面白くないのか、不満げな顔を浮かべ、キヤスターは不満ながら、さり気なく自分をアピールしていた。

「……ちつ。てめえらの話、嘘じゃねえみたいだな。どういふことだ。説明しやがれてんだ」

「あー、僕も聞きたい。さっき言っていた聖杯戦争って事も詳しく聞きたいと思っていたし」

「そうですね。では、この辺りで私とご主人様の愛と絆の冒険劇をお聞かせしましょうかー」

「違う。余と奏者のだ」

二人がまた口論しそうになったのでそれを止める。

セイバーとキヤスターはそれぞれの視点で、僕とセイバー、キヤスターと出会う切っ掛けになった物語の始まりを話し始めた。

「なるほどな。つまりオレはそのサー　ダン・ブラックモアとか言う爺に呼び出されて、てめえらと戦ったってわけか……てめえらみたいになちくりんと駄狐に負けたのは、信じらねえけどな」

アーチャーは納得したような、それでいて不満そうに頷いた。

こことは違う別の世界。

月の仮想霊子世界セラフで起こった、聖杯を巡る一二八人のマスター達による七天の聖杯を奪い合う殺し合い。そこで今の僕のデータを元にしたコピーが聖杯戦争に勝利し、聖杯を手にした。その過程で僕はアーチャーと、そのマスター、ダン・ブラックモア卿と戦い、勝利したのだ。

「それにしても、前のマスターか？　騎士道精神旺盛な爺様だな。オレとはつくづく合わねえだろうな」

「そうでもなかったぞアーチャー。あのマスターとお前は良い関係に見えた。表面上では対立していたが、マスターはお前を信じ、お前はその期待に答えようとしていた」

「はっ？　んな訳ねえだろう。潔癖、王道が好きなそんなマスターに対して、オレは奇襲、奇策、闇打ち、毒に罠を基本とする邪道だぜ。ありえねえーよ」

はっ　と肩をすくめるアーチャー。

うーん。確かに言葉だけで判断するなら、お互い両極端な位置にいる中での関係だ。対立するのは目に見えている。でも、セイバーは実際に見てきているのだから、奥ではちゃんと繋がっていたのだろつ。

百聞は一見に如かずとも言っしなー。

「それにしてもロビンフッドか。アーチャーのクラスとしてはまさに適任の英雄だよな」

ロビンフッドの武器と言えば弓だし、名射手としても有名だ。

「はっ……マスター。一応、言っておくが、オレは厳密にはロビンフッドじゃねえよ」

「えっ？」

アーチャーがなんか変なことを言い出した。

「オレの真名は確かにロビンフッドだが、あくまでもその名を借りただけの無銘の英雄だ。だいたいロビンフッドって名の英雄事体、架空の英雄だ。確かにモデルとなった人物はいるが、そいつは複数いる。そいつらが混合して生まれたのがロビンフッドって名の英雄だよ。残念だったな。オレはオリジナルじゃねえ。何か尊敬つか、憧れみたいな眼差しで見られても困るんだよ」

そう言ったアーチャー。

いや、それでも。



「それでも、僕はあなたは尊敬する。あなたがロビンフッドの名を借りた無銘の英霊でも、ロビンフッドの名を与えられている以上、ロビンフッドと同じだけの人を助けたんじゃないですか？」

「っ……！」

アーチャーが目を見開く。

「あなたはどのような人生を歩き、終えたのかは知らない。でも、ロビンフッドと言う真名を名乗れる以上、あなたは大きな力から弱い人たちを守ったんだ。だから、僕は尊敬する。あなたは立派な英雄だ」

その言葉を聞いて、アーチャーはどう思ったのだろう。

若干複雑そうな表情を浮かべた後、ばりばりと片手で頭を掻いた後、大きな溜め息を吐いた。

「まったく……前のマスターは事は覚えてねえが、今度のマスターも何か面倒臭え奴みたいだな」

むっ、面倒臭いつて何だよ。僕は本心と言ったまでに過ぎないんだけど。

「やれやれ……こういう奴じゃねえと、オレやこいつらのマスターは勤まらねえ訳か。まあ、悪くねえけどな。んじゃま、マスター。何か知らねえけどこれからよろしく頼むわ」

そう言ってアーチャーが手を差し出してきた。僕はその手をし

つかりと掴み、「よろしく」と返す。

見かけは軽く、口も悪いがやっぱり本質は悪い人じゃなかった。

よし。これでアーチャーの事は分かった。次はセイバーがキャスターだな。

さて……どっちの真名を先に聞きこようか……。正直、どっちも気になるんだけど、セイバーから聞こうか。八神さん達にも自分は皇帝だったって、言っていたし気になっていたんだよな。

「セイバー。今度は、セイバーの真名を聞いて　ん？」

コンコンと、ノックの音がした。

『失礼します。フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。衛宮さんいらっしゃいますか？』

テストロッサさん？　何だろ。

僕は立ち上がり、部屋のドアを開けた。

「どうかしましたかテストロッサさん？」

「はい。はや　八神部隊長がちょっとこちらに来て欲しいそうです。ご同行願えますか？　後セイバーさん、キャスターさんも」

「？」

何だろ。訳が分からないが、八神さんが呼んでいるなら行くしかない。

とりあえずさっき召喚したアーチャーを紹介して、僕たちはテスタロッサさんと共に建物を出た。

この後、僕は自分の傍に居るサーヴァント達の実力を、本当の意味で目の当たりにする事になる。

### 第三話（後書き）

今回は少し短いですが、アーチャーを中心に置いてみました。

予定ではなのはキャラ本格参戦のはずが、予定変更です。

次話ではいいいよセイバー大活躍……の予定です（笑）

#### 第四話（前書き）

今回はとても難しかったです。

英霊と魔導師との力関係を考えるのが……。

それにしても地味にキャスターのセリフが多いな。いつの間にか解説役になっているし。

## 第四話

『ルールは簡単や。セイバーさんは飛べへんから地上戦のみ。勝敗はどっちかが参ったって言うか、こっちが止めるまでや』

「うむ。わかったぞハヤテ」

「問題ありません」

うつそうと茂った森の中。衛宮 時雨のサーヴァント、セイバーと「機動六課」ライトニング分隊の副隊長シグナムがお互いの得物を持って向き合っていた。

何故、セイバーがシグナムと剣を交えようとしているのか。それは単純に、今後協力関係になるセイバーの実力を計る為だ。三十分前にフェイト・T・ハラOWNが衛宮 時雨の部屋にやってきたのはこの為である。

「セイバー。手加減抜きで頼む」

「よかるう。そなたも手を抜くなよ」

シグナムとセイバーは、互いに口元に笑みを浮かべる。どちらも戦士の笑みを浮かべている。

「シャーリー準備はええか？」

「もちろんです。どんな事も見逃しませんよ」

陸戦用空間シュミレーターの外。八神はやては隣で複数の空間モニターを起動して、観測用のサーチャーを制御しているシャーリーこと、シャリオ・フィリーノに確認をとった。

「セイバー。大丈夫かな？」

観戦用に投影されている空間シュミレータに視線を向けながら、主である時雨は心配そうに呟いた。

「まあ普通に戦えば、セイバーさんに勝ち目はないですね。セイバーさんは地を這うだけの虫で、向こうは翼を持っているわけですから。ですが、今回はあくまでも地上戦。そうなってくると話は変わってきますね……勝敗は七：三つてところでしょうか？」

時雨の横に立つのは、狐耳が印象的なキャスターだ。

それを聞いた時雨は何とも言えない顔を浮かべた。

「……三がシグナムさん？」

確認を取る様に尋ねる。

素人眼から見ても、シグナムは只者ではないと自覚できる。だから時雨の予想としては五分五分ぐらいだと考えていたのだ。

「キャスター。それは低すぎない？」

「そうや。キャスターさん。それは低すぎるで。シグナムはウチの部隊でも、一、二を争う近接戦のエキスパートやで」

はやても同意見のようだ。

「そうはおっしゃいますが、おそらくこのぐらいの確率なんですよはやてさん。簡単な事なんですよご主人様。各クラスには、クラス別スキルと言うのがあるのです」

「クラス別スキル？」

「言っちゃえが、そのクラスを意味するスキルが付与されるのさ。例えばオレには対魔力と単独行動スキルがあるし、その駄狐はキヤスターの名にふさわしい道具作成と陣地作成の能力が付与されてんだよ。駄狐の勝率は理由は、セイバーには高い対魔力スキルがあるからなんだよ」

アーチャーが付け加える様に説明した。

「対魔力スキル……つまり魔力に対して強い抵抗力があるわけ？」

「大正解」。さすがはご主人様です。本来、セイバーは最優のクラスです。その理由は多々ありますが、特徴としては二つ。高いバランスが取れている事と、極めて高い対魔力スキルを持っている事です。セイバーさんは魔力をほとんど持っていない為、本来なら高ランク判定を受ける対魔力スキルがおそらくBかCにまで落ちています。が、それでも半端な攻撃は問答無用で無効化してしまいます。さてご主人様、ここで問題です。ここに居並ぶ皆様とシグナムさんは何を利用して、戦うのでしょうか？」

「あつ……そうか。魔力を使うから、攻撃が無効化されちゃうんだ」



「またまた大正解」 お見事ですご主人様。ですので純粋な魔力を利用した攻撃、もしくは魔力を利用した強化などは全てセイバーさんに触れた瞬間、無効化もしくは軽減されちゃいます」

「じゃあシグナムさんがセイバーを倒すには……対魔力を超える強力な魔法を撃つか、純粋な剣技で倒すしかないって事？」

ぱちぱちと拍手するキャスター。

「流石はご主人様。聡明でいらっしゃいますね。結論を言いますと、魔力を利用している攻撃である以上、サーヴァントには本来のダメージは与えられないんです。さらに付け加えるなら、サーヴァントは英霊。基本的スペックは、人間と比べるまでもなく私達の方が上なんです。……まあ、でも実際問題、戦闘が始まればどうなるか分かりません。あのポニテ巨乳侍さんもなかなかの使い手の様ですし……それに英雄は怪物に勝てても、人間には勝てないと言う法則がありますからね」。まあ、お話はこれぐらいにして、始まりますよご主人様」

視線を空間モニターに向ける。

模擬戦が始まる。

「うむ。では、戦いを吟じるところ。」

戦いの幕はセイバーが上げた。地を疾走し、お手製の赤い長剣『  
アエストウス・エストウス』が赤い軌跡を残し、振り下ろされた。  
韻鉄の鞘「原初の火」

「はっ！」

シグナムはその一撃を剣型デバイス「レヴァンティン」でその攻撃をいなし、反撃に転じる。

セイバーもまたシグナムの鋭い攻撃を捌き、剣を振り上げる。

断続的な剣戟音が次第に加速し、氾濫した濁流の如く激しい音を奏で始めた。

双方、一步も引く事をしない。その動きは全て眼前の存在を倒すモノ。相手の攻撃に対して攻撃で防御すると言う、攻めの乱激戦。剣がぶつかり合う度に火花が散り、空気を切り裂いていく。

「はっ……」

感心したような呟きはセイバー。

連激戦の終わりは、一際甲高い鉄の音で終わった。セイバーとシグナム。互いに渾身の力を込めた一撃を最後に後方に飛び、十メートルの距離を置いて向き合った。

「見事だシグナムよ。よもや余の剣、『グラディサヌス・ブラウセルン（喝采は剣戟の如く）』を見事防ぎきるとは……感服したぞ」

「それはこちらのセリフだセイバー。私の連撃を一步も引かずに打ち返してくるとは、まさにセイバーの名に相応しい剣の腕だ」

シグナムは心からの賞賛を送り、体の奥から湧き上がる興奮を抑えきれず口元を緩ました。

高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、ヴィータ。管理局を代表する三人との模擬戦では、決して味わえない、純粋な剣技での戦い。

もっと打ち合いたい。もっと剣をかわしたい。

シグナムは、ぐつとレヴァンティンの柄を強く握り締めた。

「ふむ……。セイバーの名に相応しい、か。余はどちらかと言えばエンペラー（皇帝）のほうが良いのだが……。シグナム。そなたの実力はこの程度ではあるまい？ 存分に打ち合い、存分に楽しもうではないか？ 今のそなたは実に雄々しく美しい。まるでアテナのようだ」

セイバーは微笑む。その笑みは敬虔な信徒が、祈る神が描かれた美しい宗教画を見て微笑むように。

望む所だ、とシグナムは心の中で呟き、

「 烈火の将シグナム。参る                      ！」

この興奮を満たす為、シグナムは踏み込んだ。

「うわぁ……セイバーさん凄い。シグナム副隊長の攻撃を全部受け止めて、反撃してる……！」

「本当だ。セイバーさん凄いんですね……！」

スバル・ナカジマ、エリオ・モンディアルが感嘆の声を上げる。

「スバルのお嬢ちゃんと、エリオの坊主。そいつは少し違えよ。ありゃ、どっちも攻撃してんだよ。攻撃を攻撃で防いでんだよ」

スバルの感心の声に対して、アーチャーははんば呆れた声を上げた。

ちなみにアーチャーを召喚した件に関しては、はやてに後で詳しく説明すると伝えてある。

「ほんと、馬鹿げてるほどの力の攻防だなこりゃ。もしかしてお互いバトルマニアか？」

「あー……」

「うー……」

はやて、ヴィータがアーチャーの言葉に反半分、認める様に呻い

た。

「セイバーさんは脳筋ですからね。間違いないんじゃないですか？」

と、キャスター。

「シグナムさんは知らないけど、セイバーは戦闘狂ではないと思うけど……？」

「ご主人様。モニターにご注目を。あんな嬉々として、野蛮に剣をブンブン振り回すセイバーさんを見てどう思われますか？」

「……」

「でも、本当……セイバーさん凄いね。確かにアーチャーさんの言うように力の攻防だけど、かなりレベルの高い攻防だよ。お互いが二手、三手先を読んで剣を振ってる……」

と、真剣な眼差しで見つめていたフェイトが静かに分析する。

確かに。見かけは力に対して力でぶつかり合う、無骨な打ち合いに見える。

だがその実、一挙一動全てが相手の攻撃を読み、その先を予測して動いている。見る者が見なければ分からない格上の連撃戦なのだ。

「アタシやフェイトなら何とか捌けるが……なのはなら堕ちてるな」

「えっ?!」

ヴィータの言葉に傍にいたティアナが驚き、なのはを見た。

「にはは。ヴィータ副隊長の言う通りだね。室内とかの限定された空間で接近されちゃったら、たぶん私は捌けないね」

だがその言葉の意味は、接近さえされなければ問題ないと言う事だ。

それも当然の筈だ。なのはの得意とする距離はミドルレンジからロングレンジ。

もしセイバーと戦う事になれば、なのはは如何にして、セイバーに接近されずに倒すかが重要になる。接近されればそれだけ勝率は下がる。セイバーはその逆だ。

「セイバーさん。凄いですね……」

と、ティアナが憧れるような呟きを洩らした。

「もしこれでセイバーさんが飛べるようになったら、強敵だね。シグナムと戦うのと同じ事だし」

「うーん。ソレは少し早計なご意見ですね。なのはさん」

「どういうこと? キャスターさん?」

思わず、全員の視線がキャスターに集中する。

「確かに空を飛べるのは戦術的には有利ですが、私達サーヴァントにとって、飛行できると言うのはそれほど重要ではありません。その有利を丸ごとひっくり返す方法なんていくらでもありますからね。」

「まあ……アイタタ狐に同意したくねエがその通りだな」

含み笑いを含めたキャスターに、珍しくアーチャーが頷いた。

「どういうことですか？」

と、キャロ。

「つまりな。絶対の切り札があんだよ。オレ達はな、お前らの言う戦闘でケリが着く事は少なえんだ。結局は、英霊同士の戦いなんて宝具の撃ち合いなんだよ」

「ほーぐ？」

スバルが首が傾げる。視線が説明してくださいと訴えている。

「あー、この辺は口で説明するのが面倒だ。いつか見せてやるよ。それで質問はなしにしてくれ」

「……半端な二枚目の宝具なんてちゃくちくて拍子抜けしちゃうと思いますけどー」

「はっ……人様に言えない様な汚ねえモン、大量に背負い込んでいる駄狐を断罪するにはベストな宝具だがな」

ギンツ。と睨み合う二人。傍にいたフォワード陣は嫌でも分かる不穏な空気を感じ、距離をとった。

喧嘩になれば最悪、令呪を使って黙らせよう。

時雨は一つ頷き、再び空間モニターに視線を向け  
時雨はその異常に気付いた。

何故、自分は両手、右肩に刻まれた刻印が令呪と言う物だと、そしてその使い方も理解しているのだろうか。

前からあったような知識として頭に定着している。それも何の違和感も無く。まるで欠けているパズルに、ピースをはめ込むように。

「あっ」

掠れた声で小さく呟く。

ばちつと時雨の頭の中で、知らない記憶が再生された。

凄まじく広い空間。足元は僅かに水が張っている。無数に点在する石柱は、まるで荒らされた墓標のように見える。

正面には石柱で作られた小さな塔。その上に座る白衣の男。

そしてその白衣の男が見上げる物体は  
何だ？

「あっ」  
「？」

知っている。



お前はアレを知っている。

だってそうだろう。お前はアレを。

「つつ」

テレビの砂嵐のような音と共に映像が乱れ、同時にずきりつと痛みが走り、思わず頭を抑えた。

「ご主人様。どうかされましたか？」

アーチャーと睨み合いをしていたキャスターが気づき、直ぐに駆け寄ってきた。

「大丈夫。ちょっと頭痛がしただけだから」

痛みは確かに消えた。時雨は口元に笑みを浮かべて、心配げに時雨を見つめるキャスターに言った。

「……マスター。オレ、消えてるわ。何かあれば呼んでくれ」

僅かに険しい顔を浮かべたアーチャーがその姿を消す。ひらりつと具現化の依り代となるアーチャーのカードが地面に落ちた。

「あ、アーチャーさんが……消えちゃった？」

キャラが目をぱちくりさせて、落ちたカードに視線を向けている。

「ご安心を。霊体になっただけで傍にいますよ」

と、キャスターがアーチャーのカードを拾い、時雨に手渡した。

「さて、みなさん。あの緑いのの事は放っておいて、そろそろ決着が着きそうですよ」

キャスターの声に全員の視線が空間モニターへと注がれる。

ただ唯一、キャスターだけが何かを考えるように視線を逡巡させていた。

「レヴァンティン、カートリッジロード!」

『Explosion』

主の命令に忠実に使える剣は、その身から一発の葉莢を輩出した。

「むっ!」

シグナムの足元に三角形の紋章

ベルカ式の魔法陣が浮か

び上がり、魔力が格段に上がった事をセイバーは敏感に感じ取った。

「ほう。先に手札……いや、切り札を切るのかシグナム？」

「無論。このまま貴方と打ち合っても埒が明かない。故に先に切らせてもらう」

「なるほど。ならば余も答え、とっておきを見せてやりたいが……アレを使うのはまだ少し早い。故に今、余が放てる最強の一撃を持って答えよう。集え、炎の泉よ！ トレ・フォンターネ・アーデント（燃え盛る聖者の泉）！」

バシッと言う音と共に、セイバーの魔力もシグナム同様、底上げされる。

「シグナム……先に言っておこう。今の余の剣は、”彼の騎士王に匹敵する剣”なり！」

さらにここで、彼女はさらにもう一枚手札を切った。

彼女の宝具もそうだが、これもまた彼女を象徴するスキル。その名は「皇帝特権」。

本来彼女が持てないスキルも、本人が主張するだけで短期間だが獲得できる万能スキル。

そして、セイバーは言った。

”彼の騎士王に匹敵する剣”と。

その結果、今の彼女は文字通り、彼の騎士王と同等の剣の腕を身に付けた。

ただ空間モニターを通じて見ている見物人達は、ただの言葉として聞こえただろうが、対峙しているシグナムは違う。

「  
」

一筋の冷や汗が、頬を伝った。

薄笑みを浮かべた、さつきとは変わらぬ尊大な構え。剣を斜めに下ろした、いわゆる剣術で言う無形の位。

外見は何も変わっていない。だが、中身は全くの別物になっていた。

下手に踏み込もうならば、さつきとは全く別の動きで仕留められるだろう。それこそ、自分はおるか全ての騎士が理想と認める一撃で。

ぞっとした。だが同時に言いようのない興奮が体を駆け抜けた。

……これだ。この感覚だ。

シグナムの口元が自然と緩む。

「……ふふっ。驚いた。言葉に出しただけでここまで変わる者がいるとは、な。貴方は一体、何者なのだ？」

「何者でもない。余はセイバー。我が奏者の盾であり、剣。今は

それ以外にない」

セイバーは実に満足げに、そして誇る様に名乗った。

「なるほど……ならば……我が名はシグナム。夜天の主、八神はやての守る騎士達の将。それ以外に、ない」

「うむ。シグナム。実に良い顔じゃ。……実に余の好みだ。ぜひとも、そなたとは酒を酌み交わし、じっくりと言葉を交わし合いたいものだ」

「時間が合えばいつでも」

「そうか。それはよかった。楽しみにしているぞシグナム……」

「　　っ?!　　（な、何だ……今の寒気は……?!）」

少女の様に笑うセイバーを見て、何故かシグナムの背筋にねつと  
り纏わりつく嫌な寒気が走った。

この寒気　　覚えがある。確か気配を消した主が私の胸を触  
ろうとする時に感じる　　。

「　　では、幕引きといこうシグナム」

「う、うむ!」

シグナムは気を取り戻し、精神をセイバーに集中させる。

今のセイバーは雑念を持っていては到底勝つことのできない相手

だ。

シグナムは今湧いて出た雑念を吐きだし、意識の全てをセイバーに向ける。

一挙一足、全ての注意を図る。

二人が踏み込んだのはほぼ同時。

「ロサ・イクトウス（花散る天幕）！」

「紫電一閃！」

大気を打ち壊すような激突音。それを最後に幕は静かに引いた。

「私達の基準で判断するなら、セイバーさんは間違いなく陸戦A  
AA＋クラスですね」

模擬戦を終えて、こちらに戻ってきた二人を見て、観測していた  
シャーリーがそう結論づけた。

勝敗はセイバーの勝ち。セイバーの剣が、シグナムのレヴァンテインの刀身を叩き斬ったのだ。

「ふうむ……それはつまりどのくらい凄いのだ？」

「大雑把に言えば上から四つ目やな」

「四つ目か。半端だな……気に入らん」

至極不満げな顔を浮かべるセイバー。

「セイバーさん。AAAクラスの判定を受ける魔導師なんて、そうそうおらへんねんで？」

「それでも気に入らん。余が一番がいいのだ……ううむ、やはり宝具を出すべきだったか……いや、しかしアレは燃費が悪いからな。奏者に多大な負担を掛けてしまうし……ううむ」

ぶつぶつ呟くセイバー

「なんや、やっぱりその宝具って言うのは凄いいんか？」

宝具と言う存在が気になってきたのか、はやてはキャスターに答えを求めた。

「まあ私達、英霊の象徴でもありますしね」

「……見てみたいなー。キャスターさん、模擬戦で見せてくれへんか？」

その言葉に、キャスターは了承するように頷いた。

「見せる機会があればお見せしましょうか。ところで、私の模擬戦の相手はどなたなのでしょううか？」

「なのはちゃん。頑張つてや！」

「はいはい。キャスターさん、お手柔らかにお願いします」

「ええ。お願いしますなのはさん」

につこりと笑うキャスターだったが、時雨煮は何故かその笑みがとても恐ろしく見えた。

（キャスター……何かやるつもりだな……）

時雨の予感は見事に適當する。

「キャ、キャスターさんやめてくださいー！！」

「……んふふ、もつといい声で鳴いてくださいまし。なのはさん、どうしてでしょうか？ あなたの悲鳴を着ていると私、とてもゾクゾクしちゃいます」

案の定  いつの間にか失敬したなのはの髪を、呪符で作った人型に巻き付け、思う存分いたぶりました。



「こんな夜更けに呼び出すなんて……何か用事かー、半端な二枚目」

深夜。機動六課の隊舎の屋上。そこにキャスターとアーチャーの姿があった。

「ちつ……てめえとなんか話したくねエが……マスターの関する事だ。お前、気付いているか？」

「……何をでしょう？」

「この異常だ。普通なら、どんなに魔力があつたとしても”人間の力テゴリーを外れない”以上、英霊を維持出来るのは一人が限界のはずだ。なのに、オレ達のマスターはほとんど顔色を変えずに、三体の英霊を使役している。これがどれ程の異常なのか、分かってんだろう？」

「……少なくとも、私達を維持しているのはご主人様だけの魔力ではないでしょうね」

キャスターがアーチャーから視線を外し、夜空に輝く星に視線を向けた。

「ああ。……駄狐。テメエはもう気付いているんじゃないのか？」

キャスターの眼が僅かに鋭くなった。だが、それでも視線は星に向けられている。

「大規模な降霊魔術を使つたとしても、オレ達は呼べねえ。呼べたとしても、それは抜け殻だけだ。だが、オレ達にはしっかりと生前の人格も再現されている。こんな器用の真似が出来るのは一つしかねえ……そうだろ。駄狐？」

キャスターは答えない。

潮騒が、静かに夜の闇に響き続けた

。

## 第四話（後書き）

ご愛読ありがとうございます。ホーエンです。

第四話にして、ようやく謎を出すことを出来ました。

時たま登場する赤アーチャーとマスターの正体と目的。なぜ、時雨がこの世界にいるのか……とりあえず土台の土台は完了です。

次あたりでアグスタ編と待ちかねのサーヴァント同士の……を入れていきたいと思います。あのキャラが好きな方はこうご期待！

さて、話は変わりますが、友人から借りたインフィニット・ストラトスがちよつと面白くて、絶賛読破中です。現在四巻目に突入。二十歳を過ぎてもライトノベルをやめられない（笑）。オーフェンから始まったライトノベル……ずいぶんといういろいろ読んできたなあ。

そしてホーエン。すばらしい作品を見ると、すぐに二次創作を書きたくなる困ったやつです。

そしてISで思いついたのは女尊男卑に対して、それを変えるための力を手に入れようと日々、努力する一夏設定。オリジナル以上に鈍感でありながら、フラグは建てまくりな上、性能はチート級。さらにR15ぐらいの表現を入れたら面白いんじゃないのか？ 自分としてはそういう表現は書いたことないから、練習にもなるし……。

でもオリジナルが完結していない上、一夏にまだまだいろいろある  
るので、この作品を創作しながら、ぽつぽつと設定を考えています。

……誰かとISのことで語り合いたいですな。

## 第五話（前書き）

少し更新が開きました。まあ、ペースが落ち着いてきたと思ってください。

最長でも一週間以内には更新するように心がけます。

## 第五話

「　　そう言う事、か……」

少女は全てを理解した。

突然の接続停止、時たま感じる奇妙な夢。

なるほど。確かにこれは誤作動だ。ある筈のないパスが二つ存在している。誤作動が起こるのは当然のことだ。

「マスター」

「アーチャー……」

赤い外套の男、アーチャーと呼ばれた男はいつの間にか、少女の背後に立っていた。瞳を閉じ、腕は組んでいる。

「するべき事は分かっているだろう？」

アーチャーは簡潔にマスターの道を示し、その言葉に少女はどこか苦しげに苦笑した。

「　　うん。分かっている。それしかないって事ぐらい……もう分かっている。だけど……辛いね。会った事もない見た事もない人だけど、その過程、その生き抜いてきた価値が見えてしまう……」

「では、どうする？　明け渡すのか？」

僅かに混じった嘲笑の声。少女はくすりと笑い、今度はアーチャーに向かって挑発的な視線を投げかける。

「アーチャー。貴方のマスターはそんな簡単に、自分を放りだせる無責任な人だった？」

アーチャーの口元が緩む。

「ならば、何をすべきか分かっているな？」

「もちろん。アーチャー、力を貸して。出し惜しみなし。何もかも一回目で決める……！」

「ああ。私は君のサーヴァントだ。君の目的の為に全力を尽くす。それが私の義務だ」

アーチャーの言葉に少女は強く頷き、赤い外套を纏う。

優しい眼もとは鋭く、口元は引き締める。

赤い戦乙女は錬鉄の騎士を連れ、薄暗い部屋を出て行った。己の目的を果たす為、その邪魔な外敵を排除する為に戦場へと向かった。

空気を激しく叩くローター音がしつこい位、耳朵に響く。僅かに揺れる足元と奇妙な浮遊感。そして硬いシート。

記憶のない僕でも、これだけははっきりと言える。おそらく今が、人生で初めてのヘリコプターだ。

機動六課の世話になって数日が経ったある日、八神部隊長……いや、はやての要請でロストログア、僕の世界で言うオーパーツ的なモノが出品されるオークション会場の警備に同行になった。

まあ僕と言うより、セイバーやキャスター、アーチャーの力を借りたいと言う事なのだが……しかし情けない話だ。はやて達には世話になっているのに、何もお礼が出来ない。はるか年下のエリオとキャロがしっかり仕事をしている様子を見ると、深い深いため息が出てしまう。

ああ……役立たずって言葉は、僕の為にあるように思えてくる。

はやてが空間モニターを投影して、警備内容を丁寧に説明している。機内搭乗員用のハンガーにははやての他、なのは、フェイト、蒼い狼のザフィーラ、妖精と見間違えるような小さな少女リインフォース？、そしてスバル達新人メンバーがいる。つまり機動六課前線メンバーのほとんどが勢ぞろいしている。

後、シグナムさんとシャル先生、ヴィータは先に現場に行つて、前日から警備に入っている。



『森か……ならオレの独壇場だな』

と、霊体となって僕の傍にいるアーチャーが、どこか自慢げに呟いた。

『マスター。わりいが言ってくれねえか？ オレは単独行動するってな』

『うーむ……面倒臭いな。何ゆえ、余が騎士まがいの事をせねばならんだ。そういうのはキャスターかアーチャーで充分であろう……』

『ご主人様。あつちに着いたら少し抜け出して、その、デート……しませんか？ キャー、言っちゃったあー！』

三人とも霊体状態だとお互いに干渉出来ないから、話し相手は必然的に僕だけになる。お陰で僕はさっきから会話の切り替えに大忙しだ。

とりあえず警備の事を第一に考えよう。小声でセイバーとキャスターに少し口を閉じておいてと言って、僕は拳手をした。

「ん、何や時雨？」

空間モニターに投影されている人物、最重要広域指名手配犯ジェイル・スカリエツティと言う人物の説明をしている最中のはやてが僕の拳手に気づいた。自然と皆の視線が集まる。

「アーチャーから頼みで、単独行動がしたいって言ってるんだけど、いいかな？」

「アーチャーさんが？ うゝん……ちょっと難しいなあ……」

難色を示すはやて。当然だよな。ちゃんと警備プランを作ってるから。

『マスター。こう言ってくれ 』

「アーチャーが言うには、オレはまとまって戦闘するのが苦手だつて。それに森はオレの獵場。遊撃つて形で敵を迎撃できるし、森の助けも多分借りられるから、役に立つつて。それにいざ孤立したら霊体化して戻ってくるから大丈夫だつて」

「遊撃か……アーチャーは探知とかもできるんか？」

「森の助けが借りれば、防衛拠点を中心に広がる森は全て感知できるつて。それにガキ共の面倒はキヤスターで十分だろうつて」

『巫女  ん！ 冗談じゃありませんこの半端な二枚目！ 私とご主人様の親密濃密新婚時間を邪魔をするかぁー！ 容赦なく呪殺するぞこらぁー！！！』

キヤスターの叫び。しかしアーチャーには届かず、僕の頭の中でエコーとなって響き渡る。

本当なら実体化して叫びたいはずなのだが、ヘリの定員問題から僕は今、三人の実体化に必要な魔力供給を切つてあるので実体化出来ないのだ。

はやては少し考えるそぶりを見せ、なのは、フェイトと視線で相談する。

「ん、分かった。ほなこうしよう。アーチャーさんが森全域を探知できるようなら単独行動を認めるわ。出来ひんかった場合は当初の予定通り、エリオとキャロに付けてもらうで」

『ああ。それでいい。ありがとうよ、と伝えてくれマスター』

「それでいいって。あと、ありがとうって」

「どういたしまして。ほな、もしアーチャーさんが単独行動をした場合……キャスターさんが新人達に付けてもらおうか。セイバーさんは時雨の護衛ちゅうことで」

『なっ、何ですとおおー……!!!!』

『奏者の護衛か。うむ、心得た』

『ふざけんじゃねえですよ！ おいこら緑チャー！ なにろくでもねえ事をするじゃねえですよ！ 本気で呪殺するぞおー……!!!! 小娘もなに認めてんですか！？ 呪うぞこりゃあああああー！！！！！！』

満足そうに頷くセイバーと、狐耳をピンと立て、吠えるキャスター。

そんな二人の顔が頭をよぎった。

……キャスター。お願いだから少し音量下げてください。耳と言

うか、頭が痛いです……。

結果的にいえば、アーチャーの単独行動は認められ、

「……」

キャスターの機嫌は極限まで悪くなった。

「あ、あのー……キャスター、さん」

場所はホテル「アグスタ」正面玄関前。警備の巡回を終えたスバル・ナカジマは、恐る恐る狐耳の和服の女性キャスターに話しかけた。

「……何ですか？ 敵でも来ましたか。どこですか？ ちょっとプチ切れ状態の私に向かってくる愚かで矮小なゴミなんて、プチ転々（ゴロゴロ）しても無問題ですよね……くくっ」

無表情かつ暗い瞳。そして森のさわやか空気を一瞬で浸食し、泥沼のようなねっとり暗いオーラを出すキャスターに、スバルは大

きく後方に下がり、「い、いえ、ナンデモアリマセン」と片言で返した。

（こ、こわっ……怖いよぉ……！）

何と言う鬱オーラ、何と言う殺オーラ、何と言う怒オーラ。

それを問答無用で全身から放出し、ありとあらゆる存在に威嚇するキャスターは、スバルにしてみれば脅威と言うレベルを超えて、魔王にしか見えなかった。ぶっちゃけ、半径二十メートル以内には居たくない。

「ふふっ。ご主人様の隣は……本来なら私だけのモノなんですよ？ それをあの頭がSTAの王様気取りがアホ毛女がぁ……くくくくっ……何かもう変身しちゃおうかな……くくくくくく」

「ティ、ティア……」

思わず泣き顔で相棒の名を呼ぶ。

しかし、ティアナ・ランスターは何も答えず、考え込むように視線を下に向けている。

「ティア……？」

スバルは眉を潜めた。陸士学校時代から彼女とコンビを組んでいるから分かる。今まで見た事のないほど思い詰めた顔をしている。

「ティ……ア……」

スバルはゆさゆさとティアナの肩を揺すった。ティアナがはっと、スバルのほうを見た。

「っ。何よスバル？」

「……どうかしたの？」

何かあったのだろうか、とスバルはティアナの眼をじっと見て、思案する。

少なくともここに来るまでいつもと変わらなかった筈だ。変化があったとすれば、周辺警備を終えてこの正面玄関で合流してからだ。

一人の時に何かあったのだろうか。さっき通信で八神部隊長の事で話していたが、その時も特に気になる事はなかったのだが……。

スバルのそんな考えを呼んだのか、ティアナはいつもの気丈な表情を浮かべた。

「別に何でもないわよ。ちょっと考え事してただけ。それよりもスバル、何か　　ひっ!？」

ティアナの顔が一瞬で引きつった。スバルが不思議に思い振り返ると、そこには巨大な藁で出来た人形を持ったキャスターが傍にゐる木に人形を叩き付け、でっかい五寸釘を顔面に打ちつけようとしていた。

「人を呪わば穴二つ……な訳ないでしょう。私を誰だと思ってるんですか？ この手の人型を使った呪術なんて得意中の得意ですし……くっくっ」

「キヤ、キヤスターさん何をやってるんですか?!　　と言いかどっから持ってきたんですか?!」

「スバル止めて!　キヤスターさんダメです。釘なんか打ちつけちゃダメです!」

スバルとティアナが慌てて止めに入る。だが、キヤスターは狂気の笑みと言うべき壮絶な顔で、ハンマーを振り上げる。

良く見れば藁人形には達筆と言うか、恨みの籠った殴り書きでセイバーと書かれた札が張られている。

「くつくつく……大丈夫ですよ。たっぷりの魔力を込めて呪えば対魔力がゴミ以下のあんな脳筋なんぞ……!」

「ティア、な、なな何か寒気がするよー!?!」

「た、た耐えなさいスバル。と言いか、キヤスターさん。今は仕事です!　正気に戻って……って何か落ちた……この人形、八神部隊長?　……とにかく正気に戻ってくださいー!」

スバルとティアナは正体不明の悪寒に晒されながら、必死にキヤスターの強行を止めようと奮闘した。

「あー……何か頭痛いなあ」

現在、機動六課が警備をしているホテル「アグスタ」内にあるオークション会場。そこに完璧にドレスアップした八神はやては僅かに顔をしかめ、頭を押さえた。

「大丈夫？　このところ忙しかったから……」

「はやて。どこかで休んでいてもいいよ。セイバーもいるから、人数は足りているし」

傍にいた高町なのは、フェイト・T・ハラウンが言った。この二人もまた完璧にドレスアップしていて、見る者を問答無用で魅了する美しさを放っている。現にすれ違う男性客のほとんど振り返り、眺めている。三人が、グラビア雑誌に登場するアイドル以上の整った顔立ちをしているので、男性が振り返るのは無理もなかった。

「大丈夫や。心配してくれてありがとな。なのはちゃん、フェイトちゃん。　　そうや。時雨はどう思う？　感想聞いてへんかったなあ」

「皆さん凄く綺麗ですよ。冗談抜きに」

こちらも正装した衛宮　時雨が、いつもの人の良さそうな笑顔で答えた。



時雨も時雨でそれなりに似あっているが、如何せん女性陣が華やか過ぎて霞んでしまっている。

「うむ。実に三人とも美しい。是非、絵に残したいものだ」

時雨の隣、戦闘時に纏う武装服とは違う真紅のドレスを纏ったセイバーが腕組をして、実に満足げに言った。

「おおきにな。時雨もよう似合ってるで」

「ありがとうございます。ですが、少し恥ずかしいですね。こういう服は……」

そう言つて、自分のタキシードを眺める時雨。

「そうかな。似合ってるよ時雨君」

「セイバーは……何か凄いね。結構際どいドレスなのに……何て言うか、凄く似合っていてきれい」

なのは、フェイト、はやての三人のドレスを清楚とするならば、セイバーのドレスは間違いなく蠱惑的だった。胸元は大きく空いている上、背中クロスした紐で止めてあるだけの女性を全面に出した魅惑なドレス。だが、なぜかセイバーが着るとエロいと言つか、似合っていて様になるのだ。

「ふふん。当然だ。余を誰と心得るか」

満足げに胸を張るセイバー。

「ところでハヤテよ。余と奏者はどこを守れば良いのだ？」

「二人は二階を見て回った後は廊下で警備や。不審者がいた場合は私が、なのはちゃん、フェイトちゃんに連絡してな」

「うむ。奏者よ。その辺りの事は頼む」

「了解。使い方はばっちり聞いたし」

右腕に巻かれた時計型通信機を掲げる時雨。

「じゃあ行こうかセイバー」

そう言つて、一步踏み出した瞬間、

「ごほんっ……」

と、セイバーが咳払いをした。振り返る時雨。

「そ、奏者よ。今日の余は着飾っておる」

「？ うん。綺麗だよセイバーも」

何の恥ずかしさも無く、真っ向から褒める時雨。セイバーの頬が赤く染まった。

「う、うむ。それは分かっておる。……ほれ、奏者よ。そなたにはやることあるだろう？」

ちらりと視線を横にして言うセイバー。

「……ああっ」

その視線の先にいたモノを見て、時雨は理解した。

「……これは失礼いたしました。どうぞ、お穢さん」

一つ苦笑して、時雨は左腕で三角形を作る様にして、腕を上げた。

「う、うむ。大義であるぞ奏者よ」

そこにセイバーの手が絡む。

そうして二人は、傍から見ればどこぞの大富豪の若夫婦の如く、  
なのは達の元を後にした。

「何か……いいね。あれ……」

「そう、だね……」

なのはとフェイトが弱冠、羨ましそうな顔で二階へと上がっていき、  
二人の背中を見つめる。

どれだけ魔力があろうと才能があろうと、なのはとフェイトは十  
代後半の乙女。やはり格好いい男性にエスコートをされて見たいと  
思うのは当然のことである。

ふと思い返せば、今までの自分達は仕事仕事の連続ではなかった  
だろうか。男性と知り合う事はあってもそれはあくまでも仕事上の

関係だ。それ以上はないし、それ以下もない

青春真つただ中。花の十代の筈なのだが……何と仕事だけの時間だった事か。

しばし二人を眺める事十秒。

「……とりあえず仕事しよか」

「うん……」

「だね……」

三人とも同時に溜息を吐き、それぞれの警備ポイントに散らばって行った。

「アーチャー。どう?」

赤原礼装と呼ばれる赤い外套を纏った少女が、自らのサーヴァント、アーチャーに話しかけた。

「ふむ……なかなか良い警備体制だ。いい指揮官がいるようだ」

アーチャーは鋭い鷹の眼で、はるか先にぼつんと見えるホテル「アグスタ」に配置されている者達の場所を一つ一つ丁寧に確認し、頭の中で警備地図を作り上げる。

「ふん……それにしてもさすがはアーチャーだね。よく見えるよ……」

少女の眼から、そこに配置されている人間など全く見えない。

「人間と同じ尺度で見られるのは困るな。それでマスター。最初の一手、どう打つ？」

「……警備の様子を教えて」

アーチャーは頭の中で作り上げた警備体制を正確に告げ、そして自らの経験に基づいた予想も付け加える。

「分かった。なら、手は決まり」

そう言つて、赤い外套の下から一枚のカードを取り出し、

「キヤスター、召喚」

「よばれちゃったね」

「よばれちゃったね」

カードが消え、白と黒のゴスロリ風の衣装をまとった双子の少女

が、彼女の前に具現化した。

「おねえちゃん。もしかしておあそびのじかん？」

白の少女が首をかしげて言った。

少女は優しい微笑を称え、白と黒の双子の少女を頭を優しく撫でる。

二人がくすぐったそうに笑う。

「ええ。でも、手加減はしてあげてね」

「どうして？ あそんでくれるならいっぱいはいあそばないと！」

「そうそう。くびをちょんぎっちゃったり、うでをもぎとらないと。マーチヘアー（三月兔）がにげてしまうわ」

くすくすと顔を見合わせ、笑う白と黒の少女達。

「マスター。大丈夫か？」

アーチャーが僅かに目を細め、主の背中に視線を送る。

「大丈夫よ。この日の為に体も整えてきたから。二人とも、私のお願い、聞いてくれる？」

膝を折り、二人と視線を合わせる赤い少女。

「なにー？」

「おねえちゃんのたのみならなんでもきいてあげるよー」

「そう。ありがとう。それでね、お願いって言つのは」

赤い少女は、母親が娘に話しかける様な優しい口調で、白と黒の少女達に内容を伝える。

「わかったわ。そうやってあそべばいいんだね？」

「ちよつとおもしろいかもしれないから、いいよー」

「ええ。お願いね二人とも」

「うん。それじゃあいつてきまーす」

「いつてきまーす」

ぴょんつと崖の上から飛び降りる二人。そしてそのまま崖下の森に音も無く消えていった。

「アーチャー」

「了解したマスター」

赤い少女の声に優しさが消え、無機質で冷徹な声となって赤き騎士に命令を下す。

赤い騎士の左手に黒い洋弓が出現する。そして矢を作りだそうと

弦を引っ張ろうとした刹那  
視線を向けていた。

その動きが停止し、ある方向に

「アーチャー？」

「ふむ。招かれざる客達……いや、この場合、あちらが招かれた客で、こちらが招かれざる客だろうな」

それは偶然だったのだろう。全域を観測していたシャマル、森の加護を受けたロビンフッドもまた、そのモノ達の接近を感知していた。

ガジェット襲来。

かちりつと。

運命の歯車がまた一つ、噛み合った。



## 第五話（後書き）

またまた予定変更。次でようやく激突です。

いろいろと考えては作り直しているホーエンですが、表現力が乏しくて悲しいです。

ですから、空の境界を読んだりf a t eのゲームをして、やる気+描写力を鍛えようと思います。

・・・それにしてもやっぱりf a t eは面白いな。いまだにこのソフトだけ売ってないし。

## 第六話（前書き）

絶好調。

執筆が進む進む。このままテンションが高いうちに書き溜めておこう！

## 第六話

「これで三つ目                   ！」

茂みから飛び出したアーチャーは、今回の召喚の際に持ち込んだ生前の武器ロングボウに矢を番え、発射。放たれた矢は、四機で接近していた先頭のガジェットのカメラの部分に貫通。外部からの入力装置を失ったガジェットは安定を失い、傍にいた他のガジェットと激突、爆散した。

残った二機のガジェットがアーチャーを捕え、レーザーを発射。しかし、アーチャーは軽業師のような身軽な回避運動を行い、不敵に笑みを浮かべる。

「ははっ！   狐狩りのほうがまだ面白いぜえ！」

お返しとばかりに、目にも止まらぬ三連射。後ろ腰にぶら下げた矢入れから矢を引き抜き、弓に番え、狙い、発射。その一連の動作は一秒と掛かっていない。

高速で飛翔する矢は容赦なくガジェットのカメラ部分を的確に射抜き、さらには突き刺さった矢の上に、さらに矢を打ち込むと言う神業的な射撃もあっさりと成し遂げるアーチャー。

まさにアーチャーの名に相応しい弓の腕。

「へっ……遊びがいがないな。数が多いだけの雑魚かよ」

と、アーチャーは何気なく、腰に差した短剣を引き抜く。同時にがさりと茂みが揺れ、アーチャーの背後をとったガジエットのレーザー発射口が開く。

「はっ」

アーチャーは嘲笑う。見え見えだ。

短剣をある木に向かって投げる。ざくつと何故かぴんつと張られていた蔓が断ち切れ、ガジエットの上に大きな切り株が落下、ぐしやっと言つ目障りな音と共に潰された。

「お前らがどれだけすげえ仕掛けだろうと、森はオレの獵場だ。とつととくたばれや」

その言葉がきつかけだったのか、どんつと爆炎と爆音が次々と上がった。前もって仕掛けておいたトラップに、ガジエット達がまんまと引つ掛かったようだ。

「しっかし、楽な戦いだねえ。あの生前の方がまだ辛いぜ」

くくつと小さく笑い、肩をすくめる。そして矢を番え、矢じりを林に向ける。

敵はどこにも見えない。だが、彼には確かに見えている。森  
樹木などの視認障害など、精霊の加護を受けている彼にはないに等しい。

「んー……この辺りか」

少し歩き、射線を修正。矢に強く魔力を込め、射った。

放たれた矢は無数の生える木をすり抜け、枝を避け、自然の迷路を突き進み、がすんつと大型の球形ガジェット、ガジェット・ドローン？型の横から貫通、撃破した。

『……アーチャー』

と、耳に付けているインカムから、同じく迎撃を行っているシグナムの少し不機嫌な声がした。

『援護は感謝するが、余計な助力だ。私の相手を取るな』

「おっと、こいつは失礼。お詫びにいい事を教えてやるぜ。アンタの前方約一〇〇メートル先からお客さんが来ているぜ。数は六だ」

『……シヤマル並の探知能力だな。その上、アレだけのトラップを仕掛け、これだけの障害物があるのに良く当てるな。アーチャーの名は伊達ではない、と言う事か？』

「お褒めの言葉はありがたく受け取っておくぜ　　ん？」

シグナムと会話しながら、また部隊単位で接近してくるガジェットに向け、矢を放った。しかし矢は外れる。それを見て、アーチャーの眼が僅かに鋭くなった。

「へえ……おい姉ちゃん。どうやらキャスター……いや魔導師だったか。そいつらが出てきたみたいだぜ」

『何……ん、確かに動きが違うな』

「ちよつとは面白くなってきたな。鴨射ちが変わるかね？」

『不謹慎だぞ。真面目にやれ。後、私の事を姉ちゃんなどと気安く呼ぶな』

「へいへい。以後、気を付けましょうか」

いつも軽口で答え、通信を切る。

アーチャーが駆けだす。既に矢が番えている。

無数のレーザーが空を焼き、アーチャーに襲いかかる。だがアーチャーは口元を緩めながら近くの林に飛び込む。敵を見失い、索敵の止まるガジェット部隊。

その瞬間、林から矢の雨が降り注ぎ、ガジェット部隊を容赦なく蜂の巣にした。

「はっ……やっぱり鴨射ちから変わんねえわ」

アーチャーはそう言って薄笑みを浮かべ、次の的を探す為動き出した。

「ヴィータ」

「おうよ」

周りの敵を迎撃したシグナムは、上空で広域射撃攻撃を行っていたヴィータと合流した。

「後方に下がれ。敵が手を加えているとなると、背後が心配だ。新人達とホテルを頼む」

「分かった。ここは任せ      『前方三キロの地点からA判定の魔力反応、二人とも気を付けて!!』      -っ!」

広域管制を行っていたシャマルの鋭い声に二人は身構えそれは現れた。

眼下の森、少し崖になっている場所から赤い光がゆるりと空へと昇り、突然、尋常でない速度でシグナム達に襲いかかった。

「は      !」

ヴィータの驚きの声が終わる前に、赤い魔弾はシグナムのレヴァンティンと激突した。

三キロの距離。それをほとんど一瞬で詰めてきたその赤い魔弾の速度。普通なら回避はおろか迎撃など出来る筈はない。

だが、シグナムは迎撃した。いや、正確には偶然迎撃出来たのだ。築き上げてきた経験と絶え間ぬ鍛錬によって鍛えられた腕、そして運。この三つがあったからこそ、シグナムは偶然とはいえ、その

赤い魔弾にレヴァンティンで防げる事が出来たのだ。

「くっ                    っ?!」

ばきいんと言う音と共に、シグナムの体が弾かれ、赤い魔弾が空を舞う。

「シグ                    -!」

再びシグナムと激突する。二撃目もシグナムは何とかレヴァンティンで防ぎ、全身を使って魔弾をはじ返した。否                    そうしなければ弾き返せなかった。

「ぐっ                    がっあああ!!」

シグナムが叫ぶ。三撃目。甲高い鉄の音と反発しあう二つの魔力。それは大気を乱し、突風を巻き起こす。

「                    なっ……?!」

その風にあおられながら、ヴィータは眼を見開いた。

赤い魔弾。それは超高速で飛翔する魔力弾だと思っていたが違う。

剣のように鋭くとがった、歪な黒い矢。

信じられない。だが見れば見るほど、それは矢としてしか見えな  
い。

だが、その矢は尋常ではない、否、視認する事すら許されない速



度で飛翔し、シグナムに襲いかかっている。

こんな馬鹿げた話はない。

（なん、だよ。そ　　）

ヴィータの茫然の呟きは言えなかった。

何故ならその呟きを言う前に、黒い矢に内包されていた魔力が破裂。視覚と聴覚全てを消失されるほどの大爆発が起こった。

ヴィータはおるか、シグナムすら知らないだろう。

その矢の名は「フルンティン赤原獵犬」。

そして爆発を起こした現象は「壊れた幻想」。ブローケン・ファンタズム

正義の体現者。歪な赤い騎士が生涯を掛けて作り上げた武器であることなど、二人が知る筈もなかった。

「遠隔召喚。来ます！」

キャロ・ル・ルシエの鋭い声。最終防衛ラインを死守するフォウ

ード陣の前に、？型を含んだガジェットの混成部隊が紫の魔法陣から出てくる。

「あれって召喚魔法陣？」

エリオ・モンディアルの少し困惑した声。

「召喚ってこんな事

「炎天よ……」

えっ？」

小さな呟き。スバル・ナカジマの横から、三枚の紙切れが意志を持っているかのように召喚を終えようとするガジェットに近づき。

「燃え盛れ」

瞬間、呪符は一瞬で猛烈な炎となりて、天まで焼き尽くす地獄の火柱を作り上げた。その一撃で、半分以上のガジェットを焦熱地獄へと叩き落した。

猛烈な熱気と熱波がフォード陣を襲うが、全員があんぐりと口を開け、火柱を見上げた。

「ふっふふっ……出やがったな木偶……」

スバル、エリオが恐る恐る背後を振り返る。そこには俯いたキヤスターが、扇状に広げた大量の呪符を用意して立っていた。

「何て哀れなモノ達なのでしょう……今日は私、酷く残忍ですよ」顔を上げる。スバルとエリオが「ひいっ!？」と情けない顔で呻いた。

眼には明確な殺意。口元には嗜虐の笑み。その内に渦巻く怨念、執念、憎しみが魔力を増幅させ、異様な寒気と悪寒を撒き散らすキヤスターと言うの名の怪物がそこにいた。

「那須野を思い出しますねえ……ふふっ」

涼やかな微笑。だが、一番近くにいるスバルとエリオは震え、キヤロはフリードを抱きしめ、必死に意識を保とうとしている。そしてティアナは口元を引きつらせ、固まった。

残ったガジェットが動き出す。だがそれは同時に。

「目ざわりです」

死刑となった。

炎、氷、風。三つの属性を含んだ魔力の濁流は容赦なく、哀れな機械仕掛け達を一切の慈悲も無く粉碎した。

「少し……すっきりしました」

言葉通り、ほんの少し険しさと正体不明の威圧が無くなったキヤスターがぼつりと言った。

時間にして約三秒。残されたのは鉄の破片と、圧倒的力によって破壊された無残な光景。周りに植えられた樹木は根こそぎ倒れ、大地はアスファルトもろとも抉っている。

「あわわわわわあ……」

「凄い……と言つか怖い……」

「きゅっ、きゅくる……」

「はうううう……」

「な、何てめちゃくちな……」

新人四名プラス竜一匹。この時に心を誓った。

何があっても、キャスターだけは怒らせては駄目だと。

怒らせたら最期、間違いなく命はない。

「　　つと、私とした事が皆さんの出番を奪ってしまいましたか。ごめんなさいね」

幾分か気分が晴れたのだろうか、キャスターが人の良さそうな笑顔で四人に話しかけた。

「い、いえいえ。お気になさらずに！」

「そ、そうですよ！　た、たた助かりましたキャスターさん。ありがとうございます！」

一番近くにいたスバルとエリオが固まった笑顔のまま、キャスターを称賛した。また機嫌を損ねられたり、あんな魔法を放たれたら洒落にならない。

「……本当、無茶苦茶な人ね  
っ?! 誰?!」

「あー、みいーつけたあー」

明らかに戦場であるこの場所に合わない無邪気な少女の声。ティアナが振り返った先に、白と黒の少女が手を後ろに回して笑っていた。

「民間人? ちょっとそのあなた、ここは危険だから早く非難を  
」

「ティアナさん。逃げなさい!」

鋭いキャスターの声。いつもの軽い調子ではなく、酷く焦った声だった。

振り返ると血相を変えたキャスターが呪符を広げ、完全な戦闘体勢に入っていた。

「えっ……?」

「氷天よ。砕け!!」

呪符が奔る。

呪符を介して魔力が空間に存在する水分を一瞬で凍らせ、白と黒の少女は氷の戒めに捉えられた。

「きゃ、キャスターさん?! 何をして……?!」

キャラ口が小さく悲鳴を上げるが、キャスターは介せず、ティアナ

の元に走る。

「みなさん下がってください！ ティアナさん早くこちらに  
っ！」

氷の結晶体が割れる。だが同時に                      ソレは現れた。

「あ                      」

ティアナの思考が停止した。

獣の遠吠えか、それともただの雑音か。ただその叫び声は容赦なくティアナの耳を麻痺させ、ソレが途方もない怪物だと言う事実を叩き付けた。

白と黒の少女を守る様に現れた赤黒い異形の巨人。針金のような太い棒で構築された二対の翼。二つの丸い無機質な白い眼。そして馬鹿げた程の魔力。

「あつ                      」

ダメだ。逃げられない。

本能が告げている。

アレは簡単に自分を殺せる。

生命が諦めると告げている。

アレから逃げる、助かるなんて選択肢などティアナ・ランスター

に与えられていない。そもそもソレ自体論外だ。

選択肢は二つ。殺されるか。壊されるかしかない。

「それじゃあたのしいげーむのはじまりだね」

白の少女が純真無垢な笑顔を浮かべ、断頭台の刃を振り下ろした。

「あっ」

気が付けば、その巨人はその巨体に似合わぬ俊敏性でティアナに接近し、ティアナの存在を許さぬとばかりに豪腕を振り下ろした。

死んだ。ティアナは自覚した。

迫る拳。自分の顔以上の大きさの拳は容赦なく、自分を殺せる威力を持っている。

反撃はおろか、回避も許されない。ティアナは不思議と恐怖も後悔もなくただ。

あっ、死ぬんだ。私……。

他人事のように自分の運命を受け入れた。

「驚いた……。」「フルンティング赤原獵犬」を三回も弾くなんて……。とんでもない魔導師だね。……。手を抜いた。アーチャー？」

「いや……。確かに全力で魔力を込めていなかったが、大抵の相手なら倒せるだけの魔力は込めた。防がれたの純粹に相手が優れた技量を持っていただけの事だ」

弓を下ろし、アーチャーはそう言って、爆炎が上がる空を見上げる。

「それにしても、キャスターを役して大丈夫か？ あの手は完全に子どもだ。無邪気、無知ゆえの残酷さ……。手加減など出来んぞ？」

「でも、この世界の魔導師はかなり強力だから……。ありすぎじゃないと駄目だから……。それにほら……。他の人たちはこういう作戦、嫌でしょう？」

「一理あるな。さて……。もう一射放つか？ 魔力はまだまだ余裕があ つマスター！」

「

アーチャーが赤い外套を翻し、少女の背後に走る。

茂みから飛来する六本の矢。アーチャーの手にはいつの間にか中華風の双剣が握られ、華麗な剣舞で矢を撃ち落した。



「なかなかいい腕だ。だが私がいる以上、マスターには傷一つ付けられんよ」

「……はあ？　どういうことだ？　サーヴァントだと……？」

何処からともなく聞こえる男の声。

その声にアーチャーはほくそ笑んだ。

「ほう。この声は……よもや君が呼ばれているとはな。奇妙な縁だ。だが、名誉挽回は出来たと言う事か」

明らかに相手を知っている口ぶりのアーチャー。それもその筈だ。彼とは一度、戦っているのだから。

「あつ？　まさかてめえも……」

「ああ。お前が何を言おうとしているのか分かるぞ。シャーウッドの森の射手よ。なるほど。この戦場はお前の狩場になるな。マスター、これは少し予想外だ」

「アーチャー。……勝てるよね？」

少し不安な口調でマスターである少女は、赤き騎士の背を見て、尋ねた。

「ふっ、愚問だな。恐れるに足らない相手だ。君はそこで気楽に待っているがいい。直ぐに撃退して見せよう」

「はっ、よく言った。てめえは何かム力つくから、ここで殺してくわ。事情やらなんやら、てめえを仕留めてからその女から聞かせてもらっぜ」

「それがお前に出来るのか？」

「ぬかせ」

森の影から気配なく放たれる無数の矢。それを素早く反応し、弾く白と黒の夫婦剣。

森の射手には一度目の、錬鉄の騎士には二度目の火蓋が切って落とされた。

## 第六話（後書き）

もうちよいアグスタ編が続きます。

皆様の感想を読むことが楽しみなので、出来る限り一言でもいいのでご記入をお願いします。

## 第七話（前書き）

もうすぐ200件突破。

この調子で頑張るぞ！！

## 第七話

迫りくる死。

ティアナに振り下ろされた豪腕。

その一撃はまさに死の鉄槌。防護服ごとティアナを判別不能な肉塊へと変えるだろう。

「っ

！」

しかしその一撃はティアナに落ちる事はなかった。ギリギリのところでキャスターがティアナを体当たりして弾き、変わりにその鉄槌を受けたのだ。

ドゴツと言う鈍い音。

「キャスターさん!？」

弾き飛ばされたティアナが顔面蒼白で叫び

安堵した。

「っ……本当に馬鹿げた力ですね」

キャスターは冷や汗をかきながら、呟いた。

巨人の鉄槌はキャスターが持つ一枚の鏡と、それを中心に展開する二重の紫光の円によって阻まれていたのだ。

「呪層・黒天洞」。

敵の攻撃を自らの魔力へと変換する防御呪法。これを展開していたからこそ

彼女は生き延びられたのだ。

「はっ！」

キャスターが手を一閃する。鏡、『神宝 八野鎮石』が宙を舞い、巨人に迫る。

だが、攻撃は空を切る。接近した時と同じく、目を疑うような俊敏性で赤黒い巨人は白と黒の少女の前まで下がった。

「あー……わたしたちとおんなじだ」

「くすくす。ほんとうだ。たのしくなるねわたし」

「そうだねワタシ」

くすくすと笑う白と黒の双子。新人達はそれを見て、ぞっとした。

あどけない少女の笑い声。

しかし、新人達にはそれが闇の中で獲物を待つ悪魔の笑い声に聞こえ、戦慄した。

「……みなさん。気をしっかりと持ちくださいな」

キャスターがぼつりと新人達に向け、呟いた。静かだが強くはつきりした声。不思議と新人達の心の中にあつた恐怖が和らいだ。

「この戦場<sup>いくさば</sup>。迫り来る死に立ち向かい、最後まで生へと執着する者こそが生き残ります。お分かりですか？」

薄笑みを浮かべて言ったキャスターだが、視線はまっすぐと赤黒い巨人に向けられている。周囲には八野鎮石が周り、手には呪符。敵の攻撃に対していつでも対応できるように僅かに腰を落としている。

「死にたいのでしたら恐怖に怯えてじっとしていなさい。でも生き残れたかったら　　どうするかお分かりですね？」

ちらりと挑発的な視線で四人を一瞥するキャスター。

「　　っティア！」

その視線を受けて、最初に行動に移したのはスバル。叫ぶと同時に、キャスターの隣まで走り、拳を握り締めた。次はエリオ。己の役割を思い出し、前線より僅かに後方、二人の援護、フルバックのキャロを守る立ち位置に立つ。

（そうだ……怖がっている場合じゃない　　！）

ヒビだらけの心と震える膝に渴を入れ、ティアナは立ち上がり、素早く自分のポジションに付いた。

心に刻まれた初めて体験した死の恐怖。

本当の事を言えば逃げ出したい。みつともなく恐怖に震え、大泣きしたかった。

だが、それは意味がない。それにそんな事、後からいくら出来る。

ここは戦場。生と死の交差点。

生が欲しくば、例え震え、泣き叫ばうとも目を逸らさず、前へと突き進むものにのみ与えられる。

「スバル、回避を最優先。エリオはキャラのガード。キャラはサポートに徹して！ 行くわよ。みんな！」

「おう！」

「了解！」

「分かりました！」

「……いいですねえ、若いつて。無限の可能性と言いますが、ちよつとしたことで凄いい成長しちゃいますし……つといけないいい。私もそうでした」

キャスターは小さく微笑む。その顔は母親が子どもの成長を喜ぶ自愛に満ちた

小さな小さな笑みだった。

「さて」

僅かに緩んだ気を引き締め、キャスターは白と黒の少女に鋭く睨みつけた。



「キャスター……いえ、あります。黄泉比良坂から這い上がってきた……訳ではなさそうですね」

「なにをいつているのかしらあのひと。ねえワタシ」

「そうね。ぜんぜんわからないわ。どうしようかわたし？」

「よくわからないわ。でも、わたしたちはあそびにきているから」

「じゃああそびましょうめいっぱい。いっぱいっぱいあそんで、いっぱいっぱいちょんぎっちゃおう」

二人が両手を合わせ、

「じゃあもうひとり、おともだちをよびましょうワタシ」

「あのこね。分かったわわたし」

両手を掲げた。

「さあ、いらっしやい！」

赤黒い巨人の隣の空間が大きく歪む。

いや、空間が軋んでいるのだ。ありえないものが空間を無理やり捻じ曲げながら、這い出ようとしている。

這い出たソレは、四足の真っ白い獣。毛並みなどなく、純白といってもいい。背には左右の大きさが違う四対の翼。そして丸く無機質な紅の双眸と、その身に宿す出鱈目なほどの膨大な魔力。

「何よ……この魔力……馬鹿げてる……！」

震えた声でティアナが呟く。やはりまだ恐怖は消えないのか、全員の手が震えていた。

「ジャバウォックと同格か……少し下、ですかね……やっかいですねぇー」

いつもと変わらない声で呟くキャスターだが、内心は冷静かつ困惑していた。

彼らは簡単には死なない。いや、そもそも「死」と言う概念さえない。

信じられない話だが、あの巨人「ジャバウォック」と獣「グリフォン」の力は平均的な英霊以上の力を持っている上、あの少女達が存在する限り、何度でもよみがえる。

何故なら彼らは生き物ではなく、ありすと言う少女が夢見たカタチだからだ。

「ジャバ……ウォック？ キャスターさん、知っているんですか？」

スバルが尋ねる。

「ええ。よく知っていますよ。獣のほうは知りませんが、巨人のほうはジャバウォック。そしてあの白と黒のいけすかないゴスロリ双子……白い方があります。黒い方は私と同じサーヴァントです」

「キャスターさんと同じ……?! それってどういうことなんですか?」

「さて……それは私も聞きたいぐらいですねえ。……最も、私の知る二人とは少し違うようですが……」

キャスターは思いだす。衛宮 時雨のサーヴァントとして戦い抜いたあの聖杯戦争を。キャスターは目の前の彼女とも戦った。

既に現実には肉はなく、電子の海でしか存在出来ない情報の集合体サイバーゴーストのマスター、あります。

そのありすのサーヴァント、黒のアリス。真名はナーサリーライム。正体は実在の英雄ではなく、実在する絵本。子ども達の夢を受け止めていく内に一つ概念として成立し、「子ども達の英雄」としてサーヴァント化した異端の英霊。

(どういうことでしょうか……?)

サーヴァントはサーヴァントの気配を感じる事が出来る。

故に困惑する。

白のありすがいることに。さらにマスターだった筈の彼女からにも、サーヴァントの気配がする事に。

(……はあ、まあ別にそんな事どうでもいつか)

気持ちを切り替える。

そうだ。そんな事どうでもいい。過程など自分が調べようがない。ただ、謎の過程から生じた結果を見るだけで十分だ。

「（このメンバーでは……少し苦しいですね……半端な二枚目は無理として、セイバーさんぐらいでしょうね。任せられるのは）……ティアナさ」

「キャストさん。応援を呼びました！こちらにセイバーさんとなのはさんが向かっています。あと、時雨さんにはフェイトさんが護衛に付くそうです！」

「あらあら……」

キャストはほんの少しだけ目を丸くして、ちらりと背後にいるティアナを見る。

賢い子だと思っていたが、ここまで出来る子だったとは。キャストは感心と了解を含めて頷いた。

「そろそろいいかしら？」

無邪気なありすの声。

新人達が身構え、キャストが呪符に魔力を込める。

「それじゃああそびましょう。じょうおうさまがほめてくれるくらい。たくさんたーくさん！」

意味不明な咆哮を上げたジャバウォックが地を駆り、歪な翼を広

げたグリフォンが空を駆ける。

白と黒の少女達が戯れる、命を掛けたゲームが今始まる

。

「ちっ

」!

「はっ

」!

交差する線と円。

複雑な木々の間を鋭く、そして高速で駆け抜け襲いかかる無数の鷹の矢。それを撃ち落とすのは白と黒の流麗な軌跡。

戦闘を開始して五分。既に戦いはこう着を迎えていた。

精霊の加護、そしてドルイド僧としての知識を持つアーチャーにしてみれば、森は最高の狩場だ。格上の相手だろうが多数の相手だろうが、森であるならば殺害、もしくは撃退する事も不可能ではない。

「っっ

」

毒矢を番え、弦を引き絞る。狙いは上半身。当たらずとも掠れば、それだけで致命傷の猛毒だ。その矢を立て続けに三連射。相手はこちらの姿を捉えていない上、明らかに死角から放った。当たらない筈はない。

「はっ

」!

だが、赤い騎士は迎撃する。回避出来る矢は余裕を持って回避し、出来ないものは双剣で打ち落とす。

(やろう

!)

アーチャーは唇を噛む。

間違いない。あの赤い騎士はこちらの手札を知っている。

本来、回避行動とは最小であれば最小でよい。かの大剣豪宮元武蔵の一寸の見切りにあるように、ギリギリであればあるほど動作は最小で済むし、攻撃に転じやすい。

それをあえて大きく回避して見せるのは、その矢がまぐれでも当たれば脅威と知っているからに違いない。

(オレの真名を知っている上にコレかよ。まあ考えれば当たり前だよな……くそっ、いらいらすんな……!)

加えて背後に立つ女　マスターの事を常に気に掛け、自分に向けられた殺気が消えるとすぐさま、マスターの護衛に付く。さらに深追いもせず、迎撃と護衛を両立できる距離を維持する。

（それになんだあ。あの双剣の技量……ふざけんじゃねえ、本当にアーチャーかよ!?）

数少ない誇りとする弓では勝負が付かない。ならば近接戦闘だが、アーチャーの近接戦闘はあくまでも護身程度だ。腰に佩いた短剣を用いた体術も我流に近く、武を誇りとしている英霊達から見れば兎戯にも等しいだろう。

極めつけはあの赤い騎士の剣は本物だった。優れた才能など無く、ただ鉄を鍛えるように極められた、弛まぬ修練の果てに辿り着いた技量。正直、近接戦闘では負けるだろうと確信した。

（くそっ……こっちは手詰まりかよ……!）

忌々しげに歯を噛み締めた。

アーチャーは気づいていない。自分は手詰まりだと判断したが、実は違う。彼の赤い騎士と自分との差は習性と相性から来る誤認であることに。

生前から一对多数、もしくは不利な状況下で戦ってきたアーチャーは、常に勝利のためならば手段を厭わなかった。毒矢も必要な手段として使い、奇襲も当たり前のように行った。

それは当然の事だ。英雄でもないただの無銘の人間が、一人で多数の敵を撃退するそんな”英雄じみた行動”が出来るはずが無い。故の結果。非道卑劣と罵られようが、常に奇策、弱点を冷酷に突くしかアーチャーは敵と戦えなかった。

そう。彼の誤認の一つがこのアーチャーの習性だ。

常に弱点を突く。敵の死角に回りこみ、最も隙が見える場所を狙う。それがこの赤い騎士の持つ技術と相性が悪い。

何故なら、赤い騎士は自ら自然な隙を作り出し、弱点と死角と言う形でアーチャーに攻撃箇所を限定させているのだ。

まさにコレは凹凸だ。アーチャーが自らの習性に忠実になればなるほど、赤い騎士にしてみればそれだけ自分の生存を勝ち取れるのだ。

「ふん……その程度か森の守り手よ。シャーウッドの殺戮技巧もたいしたことは無いな」

赤い騎士は挑発とばかりに、口元に皮肉な笑みを浮かべて言った。

だが、表情とは正反対に彼は少ばかり焦りを感じていた。

今の状態は薄氷の上を歩くのと同じ事だ。こちらの回避方法がばれれば、一巻の終わりだ。敵の弓は本物だ。相手の習性、攻撃箇所の限定、その二つのメリットがあったからこそあの矢をかわせたが、それが無くなれば回避は難しくなってくるだろう。

『はっ……ふざけんなよ。こっちの手札を知っている癖に、そんな口がよく叩けたもんだ』

森の助けを借りて、位置を特定されないように反響させて答えるアーチャー。

「戦場とはそんなモノだろう？ 情報を制したほうが勝つ。それ



は古来からの常勝手段だ。それとも正々堂々と戦うのが君の方針だったかな？」

『はん……そうだな。んじゃま、ちよっくら本気を入れるか』

「ほう。今までが本気だと思っていたが、まだあるのか。それは楽しみだ。だがその前にお前が生きていればの話だがな」

赤い騎士が白と黒の剣を手放し、黒い洋弓と矢を出現させる。

アーチャーが眉に皺を寄せる。

おかしい。敵は未だにこちらの位置を特定できていないはずだ。なのにどうして弓を持ち出して。

その時、大きな魔力の流れを肌で感じ取った。

視線を赤い騎士の背後へ。

彼のマスターが何かを唱え、片手を掲げている。

「アーチャー！」

ふっと笑みを浮かべ、赤い騎士が弓を引き絞る。

「コードキヤスト。v a n i s h | a d d !」

魔力が放出される。最初こそアーチャーは、何の魔術なのか見当がつかなかったが、体に流れる魔力の、僅かな異常に気付いた。

（やべえっ！）

顔に焦りが浮かぶ。

信じられない事だが、精霊の加護が消された。いや、正確には無効化された。

「そこか」

赤い騎士の鷹の眼が敵を捕える。赤い騎士が洋弓を引き絞り、流れるような動作で三連射。その矢は二本はかわしたが、一本が肩を直撃する。

「ちっ　　！」

肩から奔る激痛に耐えながらすぐさま息を殺し、気配を隠す。精霊の加護を失っても、アーチャーの気配遮断は見事なモノだ。動かず、殺気さえ出さなければ正確な位置を特定する事は難しいだろう。

「……ふむ。精霊の加護を失って尚、この気配の消し方。アサシンに匹敵するやも知れん。賞賛こそするが、それでどうするのだ？ シャーウッドの射手よ。このまま無意味に時間をすごすのか？」

嘲笑の口元で赤い騎士は、辺りを見回しながら言った。

（うつせえ黙ってる。くそ……あいつも厄介だが、あの女も厄介だな。まさかこっちの守護を無効化させる術を持っていやがるとは……）

茂みの中からうかがうアーチャー！。

（しゃーねえな。こいつに頼るとするか……）

視線を右手に。そこには彼の最も頼りとする装着型のボウガン

否、彼の宝具があつた。

「行くぜ。白髪頭。後悔すんなよ　！」

右手に魔力が込め、地面に叩き付けた。

「むっ！？」

赤い騎士が何かに気づき、マスターを抱えると同時に大きく後方に下がる。

そして、それを追う無数の草の蔓。それは蛇のように周到に赤い騎士を捕縛しようと迫る。

「続けていくぜ！」

アーチャーが宝具「祈りの弓」イー・パウを地面に向けたその時。

「マスター。舌を噛むなよ」

「えっ　　きゃあ！」

赤い騎士があるうことが、マスターを空へと高く放り上げた。

「ああっ！？」

思わず動きが止まるアーチャー。それが致命的だった。

赤い騎士の左手には黒い洋弓と、右手には矢ではなく、刀身が捻じれた剣がある。

「I am the bone of my sword（我が骨子は捻じれ歪む）」

赤い騎士の言葉が静かに大気を揺らし、アーチャーを戦慄させた。

剣を矢のように番え、赤い騎士はアーチャーがいるであろう場所に剣先を向け

「偽・螺旋剣」  
カラドボルグ

赤い騎士の手から、矢と言う名の剣が放たれた。

轟音と轟風。

放たれた矢は一言で言うなら超高速で突撃する削岩機。射線状に存在していた木々や大地、大気すらも存在を許さぬとばかりに捻じ曲げ突き抜けていった。

残されたのは無残な、何処まで続いているのか分からない破壊の直線だけだった。

と、ひゅーと言う落下音。赤い騎士は空を見上げ、少し位置を修正した後、

「ふむ。失礼したマスター。無事か？」

その腕の中に赤い騎士の主が落ちてきた。

「……普通……もうちょつとやり方ない？」

無然で僅かに頬を染めた赤い騎士の主が、視線と口調で抗議した。

「仕方あるまい。この方法が一番良い方法だ」

そう言つて、赤い騎士は主を下ろそうとして  
再び背後に  
飛んだ。

「えっ      っ！」

抱きかかえられたままのマスターが異常を感知した。

周囲に満ちる空気が泥のように粘り気のあるモノに変化していて、  
息を吸う度に胸の奥にじわりと痛みが奔った。

「祈りの弓<sup>イー・ハウ</sup>……！」

「手ごたえはあつたのだが、仕留めそこなつたか……まあいい。  
引くぞマスター」

赤い騎士はさらに大きく後方へと飛び、そのまま崖下へと落下した。

「      っがあ……痛つてえ……！！！」

茂みが揺れ、左腕を抑えたアーチャーが苦痛に顔を歪めて現れた。

左腕はずたずたになり傷だらけ。指も数本、おかしな方向へと曲がっていた。

「くそっ……あの野郎……」

忌々しげに呟き、周囲に展開している毒の結界を解除する。

赤い騎士が落ちた崖まで歩き、崖下に視線を見下ろす。

「カラドボルグ螺旋剣だと……フェルグスの武器じゃねえか。だが」

英雄と宝具は一体である。故にどちらかの名を知れば、敵の正体はおのずと判明するのだが、それが不可解だと言わんばかりに眉を潜めた。

「カラドボルグ螺旋剣。」

アイルランドの英雄、フェルグスが所持していたとされた魔剣の名だが、あの赤い騎士がフェルグスとは思えなかった。

仮にあの赤い騎士がフェルグスなら、招かれるクラスは「アーチャー」のクラスではなく、「セイバー」のクラスだ。

加えてこちらの矢を打ち落とす使っていた武器は、最も信頼に足る螺旋剣ではなく、見た事はない中華風の双剣を使っていた。

「一体なんだよ……ああー、訳分かんねえな！」

苛立ちを現すようにアーチャーは頭を掻き毟った。

敵が宝具を使い、こちらは何とか生き残った。良し悪しで言うなら間違いなく良しと見るべきなのだろうが、今回はとてもそうとは思えなかった。敵の宝具が分かつて、相手の真名が分からないのだ。

「くそっ……今回はオレの負け                    っ！ マスター?!」

突然、自分に流れ込んでくる魔力が急激に下がった。アーチャーはすぐさまはるか先に見えるアグスタへ向け、全速力で駆けだした。

## 第七話（後書き）

次回ぐらいでアグスタ編終了の予定です。



## 宝具解説（前書き）

オリジナル設定込みです。

## 宝具解説

### アーチャー（ロビンフッド）

イ・バウ  
祈りの弓

ランク：C

種別：対軍宝具

レンジ：1～30

最大補足：50人

詳細：毒の結界。結界内をイチイの毒で犯す事が出来る。結界に取り込まれている時間が長ければ長いほど毒は強くなり、効果を増す。結界範囲が小さい上、魔力をあまり消費しない為、複数の結界を展開する事が可能。

### キャスター（ナーサリーナイム）

クイーンズ・グラスゲーム

永久機関・少女帝国

ランク：E～A+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1

詳細：宝具と言うより、このナーサリーライムの特性。主の心を映して主が夢見たカタチの疑似サーヴァントを作り上げる。能力は込められた魔力によって変化する。非常に燃費が悪いが、魔力さえあれば際限なく疑似サーヴァントを作り出せる。仮に一般的な魔導師がこの宝具を使った場合、せいぜいCランク程度の疑似サーヴァントしか作り出せない。



## 第八話（前書き）

今回でアグスタ編は終了です。  
謎を残しまくりますが、布石という事で温かく見守ってください。

## 第八話

「！！！！」

獣の叫び声か、はたまた人工的に作られた雑音か。判断のつかない咆哮を上げた禍々しい赤黒い巨人、ジャバウォックが地を揺らしながら迫る。

迫る巨人は死そのもの。見る者に恐怖を、迫る者に死を叩き付ける。

「ふん　　！」

だが、その死を物ともせず、正面から地を這うように迫る赤い流星。振り下ろされた豪打。一撃でも貰えば人間はおろか、魔導師ですら耐えきれぬ攻撃を赤い流星は交わし、赤い長剣を一閃した。

ジャバウォックの右足が切断される。崩れる巨体。そこに、

「うおおおおお！！！！」

蒼い流星が飛び込み、顔面に拳をめり込ませ、打ち抜いた。

「！！！！」

盛大な土煙を上げ、倒れるジャバウォック。

「クロスファイヤーシュート！！」

燈色の星が殺到。爆発を呼び、土煙をさらに高く巻き上げた。

「うむ……なかなかよいタイミングだったぞ。スバル。ティアナ。褒めてつかわすぞ」

赤い流星、スバルが感心するように二人に声をかけた。

「あ、ありがとうございます。でも……」

蒼い帯状の道、ウイングロードから地上に降りてきたスバルの顔は晴れなかった。

今の一撃は、自分でも完璧と言えるほど決まっていた。手ごたえはあった。だが、敵にダメージを与えた実感は全くなかったのだ。

ローラーブーツとナツクルを用いた格闘技法「シューティングアーツ」、近接戦闘技術における才能、さらに近代ベルカ式による強化。その三点によって繰り出されるスバルの一撃は重く、Bランクの魔導師とは思えぬ破壊力を秘めているに間違いなく。

スバルが土煙に視線を向ける。案の定、そこには五体満足のジヤバウオックが悠然と佇んでいた。

「くっ……」

「今の攻撃でも駄目なんて……どんな出鱈目なのよあのジャバウオックって奴は……！」

ティアナが悔しげに言葉を漏らす。スバルも同様だ。だが、セ

イバーだけ、表情を特に変えず、じつとジャバウオックに視線を向けている。

「……ふむ。ティアナ。気付いているか？」

「は、はい？」

「余が斬り飛ばした右足を見てみる」

「あっ！」

ジャバウオックの右足。膝のあたりで斬り飛ばした後があつた。

「先程まで一瞬で再生していたが、徐々に遅くなつておる。加えて、反応も僅かだが鈍い。悲嘆することはないぞ。あのジャバウオックは、あの海で出会つた時より弱い。このまま攻めるぞ。

夢はいずれ覚めるものだ。覚めない夢などない」

剣を構え直すセイバー。

「ティアナよ。そなたは些か打撃力がない。よって、敵の攻撃を妨害する事に徹しよ。スバル。そなたは本命だ。敵を打ち砕くことだけを考えよ。よいな？」

「っ……はい」

「はい……！ 分かりました！」

「うむ。では参るぞ！」

赤と青の流星が、禍々しき赤い星を打ち砕く為に迫る。

「この！」

ジャバウォックが走りだそうとしたのを見て、ティアナが銃型デバイス「クロスミラージュ」を両手に構え、魔力弾を連射する。

だが、ジャバウォックはその魔力弾に一切反応せず、眼前に迫る赤と蒼の流星に丸く無機質な視線を向けている。

（くっ……くそっ……！）

唇を強く噛む。射撃をやめ、魔力弾を複数生成、カートリッジを一発消費して魔力を込める。

身体能力と戦闘経験からセイバーがジャバウォックの注意を引き付け、腕や脚を切り飛ばし、攻撃を妨害する。その体勢を崩したわずかな瞬間に、スバルが踏み込み、渾身の力を込めた豪打が炸裂する。

「良いぞスバル。敵の攻撃は無視しよ。余を信じ、踏み込むがよい！」

「はい！」

セイバーとスバル。お互い連携の訓練はおろか、共闘すら始めてだと言うのに抜群のコンビネーションを見せて、ジャバウォックを翻弄、着実に削っている。

（　　っ！）



ティアナがどこか悔しげに眼を細めた。

セイバーと連携して攻撃しているスバルの動きが、自分と組んでいる時より、数倍動きが良く見えるのは気のせいだろうか。

いや、気のせいじゃない。

スバルの動きは間違いなく良くなっている。その理由は一体何か、自問するまでもなく答えはあっさりと出る。セイバーだ。

彼女がスバルの才能をうまく引き出しているのだろう。そしてスバルの長所、一点突破の戦い方を理解して、それを生かすように経ち回っている。さらにスバルが攻撃に専念できるように、注意の言ったジャバウォックの視線を無理やりにも自分に向けさせている。

(……当然よね)

諦めに似た呟きが漏れる。

セイバーの事は大まかに聞いている。歴史に名を残した人物であることを。その事実だけで、彼女が”凡人”ではないと言う事は明白だ。

単体でも優れた力を有し、さらにはスバルの才能をうまく引き出して、ジャバウォックと戦っている。自分には到底できない。おそらく自分にできるのはスバルの長所を使えるだけで、セイバーの様に長所のさらに引き出して使えない。

それが”凡人”と”天才”の差なのか。

視線を上。

ジャバウォックと同格の白の獣「グリフォン」が、その鋭い爪と牙を持つて、高町なのはを引き裂こうと迫っていた。

グリフォンの速度は速い。だが、なのはは決して敵の攻撃に当たらない。華麗とも言える飛行技術でひらりと返し、無数の魔力弾を一瞬で生成、倍近いダメージを持つて迎撃する。

空中から響く無数の爆発音。それなりの腕の立つ魔導師ですら、あの魔力弾の連続攻撃を喰らえば間違いないで撃墜される。だが、敵は死なない。ジャバウォック同様一瞬で再生し、貪欲かつ勇猛に襲いかかる。

地上からよく見えないが、なのはの顔は明らかに余裕が見て取れた。そして速いながらも、攻撃が単調なグリフォンに飽き飽きしているようにも見えた。

いくら単調といえども、その速度は恐ろしく速い。少なくとも自分や普通の空戦魔導師ならかわせない。さらに一瞬で十数発の魔力弾を生成、発射、制御する技術と魔力量。

遠い。果てしなく遠い。手を伸ばしても決して届かぬ天上の星のように、限りなく遠い場所だった。

チャージが終了する。三度の射撃で、ジャバウォックにダメージを与えられる魔力弾の強化の度合いは把握している。限界とまではいかないが、それでもかなりの魔力を込めなければ突破出来ない。

加えてチャージ中は魔力の運用に集中する為、ろくな動きが出来ない。一人では、確実にティアナ・ランスターは虫のように殺されるだろう。セイバーとスバル、その二人が前衛いてこそ、この戦場ではようやくティアナは一人前だった。

「ティアア！」

スバルの声。ティアナの意識が前に向く。

置き土産だと言わんばかりに、右からスバルの一撃がジャバウオツクの脇腹をねじ込み、セイバーの一閃が首を飛ばす。そして、二人が息を合わせた様に後方に離脱した。

「クロスファイヤー……シュート！！！」

全十四発の魔力弾がジャバウオツクに殺到。耳障りな絶叫が木霊する。

ダメージを与えられた。しかし、ティアナは歯を強く噛み締めた。

「？」

「どうしたの時雨？」

「いや……何でもないです」

セイバーが応援に向かい、すれ違うようにフェイトと合流した時雨は、とりあえずはやてと合流する為にオークション会場に向かって歩いていった。

しかし、不意に誰かに見られている気配を感じ、後ろを振り返った。

既にオークションは始まっている。調度品が所々置かれた廊下に人がいる筈はない。

だが、気になる。時雨は後ろを見ながらフェイトに声をかけた。

「……フェイト。何か視線を感じない？」

「えっ……ううん。私は何も感じないよ。ねっ、バルディッシュ？」

『Yes.』

「そう……」

自分とは比べられない程の経験を積んだフェイトとそのデバイス「バルディッシュ」が言っているのだ。間違いはないのだろう。しかし。

「時雨。慣れない事をしているから疲れちゃったんだよ」

その言葉に、時雨は僅かに眉を寄せた。

確かに三人の魔力供給をして、ボディガードの真似事なんてしているから、疲労に気疲れはしているだろう。

だが……やはり気になって仕方がない。

いや、それ以前にこの視線、どこか感じた事はなかっただろうか……と時雨は記憶を巡らせるが、思い出せない。

時雨はしばらく背後を睨みつける様に見つめていたが、やはり何も無い。時たま聞こえるオークションのアナウンスの声が耳に入るだけだった。

「時雨、行こう」

フェイトが促す。時雨は後ろ髪を引かれる思いだったが、気を取り直して前に視線を向けた瞬間。

「見事よ。儂の視線に感づくとは、な」

何処からともなく聞こえた感心した眩き。

同時に物凄い衝撃が胸元に叩きつけられ、時雨の体が大きく後方に吹っ飛んだ。

スバルとティアナ、セイバーがジャバウォックと戦っている場所から少し離れた森の中、エリオとキャロ、そしてキャスターがあのありすとナーサリーライムと敵対していた。

「はあっ!」

エリオが槍型デバイス「ストラーダ」を振り上げ、ナーサリーライムと斬りかかった。

「くすくす……こつちよ。こつち」

「くすくす……ほらほら三月兎が逃げてしまっわよ？」  
マーチヘア

「こんのちょこまかと……いい加減に往生しやがれえー！」

「キャスターさん。追い込みます！ キャロ！」

「うん！」

「よつし！ エリオさん。黒いのは容赦なくぶつ刺しちやいなさい！ 白い方は私がイテこます！」

ありすとナーサリーライムは氷の上を滑る様に地上を軽やかに移動し、楽しい表情を浮かべて三人を翻弄する。敵は自衛の為の攻撃しかしてこないが、三人はその軽やかでふわふわした動きと木々に邪魔されて、二人を捕提出来ない。

キャスターはありすの「おばさん」発言に少し頭に來ているが、状況はキャスターに取って良かった。

疑似サーヴァントを生み出す宝具「永久機関・少女帝国」の他に、この二人にはさらに恐るべき技能を持っている。それが魔術の最高峰、術者の心象世界を具現化させる禁忌、「固有結界・名無しの森」クイーンズ・グラスゲーム。ある意味ではキャスターは宝具よりもこの固有結界のほうに注意していた。

対象の自我や記憶、更には存在の忘却を引き起こし、その果てに全てを虚空の彼方に失った者を消滅させると言うこの「固有結界・名無しの森」は、英霊相手なら効果は低いが、人間なら別だ。例えば、どれだけ莫大な魔力を持っていたとしても、人間と言うカテゴリーを外れない以上、存在自体の格が一段階も二段階も上の英霊が使う術には歯向かえないからだ。

そう、展開されれば最期、例えばSランクと言う驚異の魔導師ランクを持つ高町なのでも一巻の終わりだ。

故にキャスター、エリオとキャロの最大の目的は、あの二人の「固有結界・名無しの森」を展開させる時間をやらないこと。撃破は二の次だ。

「氷天よ                    かはっ?!」

キャスターが呪符をかざし、敵の逃げ道を氷塊を持って防ごうとした刹那、キャスターの体が突然崩れた。

「キャスターさん?!」

キャロの援護を受け、突進しようとしていたエリオがキャスターの異変に気付き、声を上げる。

何か攻撃が当たったのかと思ったが、敵も突然のキャスターの異変に、足を止め、きよんとした表情を浮かべていた。

「これ……は、あ……」



胸を抑え、息も耐え耐えに呟くキャスターの表情には、これまでにない焦りが見て取れた。

「まず、い……！　つご主人、様！」

立てないのか、地面に座り込んだまま、キャスターは恐怖と悲しみに染まった顔で、アグスタへと視線を向けた。

「し、時雨！？」

一瞬、何が起こったのか理解できず、フェイトは茫然としてしまったが直ぐに時雨の元まで走った。

何が起こったのか分からない。ただ何処からともなく声がして、次の瞬間には時雨の体が五メートル以上後方まで吹っ飛んだ。

困惑のまま、フェイトは時雨の体を抱き起した。時雨の体はぐ

ったりとしていて、びっくりとも反応しなかった。

「無駄だ。手加減したと言え、儂の一撃を喰らえば人間は耐えきれん。呵々（カカ）」

「誰!？」

あの声だ。フェイトは周りを見渡すが、誰もいない。魔法でも使って姿を消しているのか。バグのアクセサリとして付けている待機状態のバルディッシュに念話で敵の位置を探るよう指示する。

『魔力反応なし。その他全補足項目を使用しても、ターゲット捕捉できません』

『そんな……もう一度探して!』

ありえない。魔法であれ科学であれ、完全に捕捉出来ないとはいえ、痕跡ぐらいは見つけられるはずだ。

だが、バルディッシュから返ってきた言葉は反応なし。バルディッシュの索敵を完全にかいくぐるステルス性。フェイトは戦慄せずにはいらなかった。

「無駄だ無駄。機械如きで儂は捕まえられん。さて……些か詰まらぬが……んっ？」

「く……あつ、がはっ……!？」

「時雨!？」

胸に響く激痛に耐えながら、時雨がフェイトに支えながら上半身を自力で起こした。

「ほう……驚いた。我が一撃に耐えたか……。呵々々々。いやはや愉快愉快。どのような小細工をしたかは知らんが、まあ良い。また打ち込むだけだ」

ぞわつとどこからともなく放たれる絶対の殺意。息が詰まる。空気が凝固した。

「バルディッシュュ！」

その殺意にひるむことなく、フェイトが戦闘態勢に入る。ドレス姿から一変、白いマントを羽織った黒い防護服を纏い、手には閃光の戦斧バルディッシュュを持つ。

「むう……その女。なかなか功夫だな……。いやいやこの世界は実に驚かせられるな。年端もいかぬ娘がこれほどの功夫を持っているとは。……よかるう。少し遊ぶか？」

その瞬間、フェイトの前方、十メートルに赤い髪の偉丈夫が立っていた。

「っ！？」

フェイトは再び戦慄した。

今、目の前に現れた男。気を抜いていた訳でもない。完全な戦闘態勢に入ったフェイトですら、どうやって目の前に現れたのかまったく分からなかったからだ。

「お前は！」

「言葉は入らぬ。武で語ろうぞ」

ずっと拳を構える赤い髪の偉丈夫。フェイトは敵の一挙一動見逃すことなく、注視する。

初見での予測。デバイスを構えず、拳を構えている所を見ると近接戦闘に特化していると見える。加えてあの完全なステルス性を実現した、気配と姿の消し方は脅威。その他の能力は不明だが、視線で睨み殺せそうな鋭い目つきと空間を支配する圧倒的重圧から想定して、並の……否、ほんの些細なミスが、一瞬で死を呼ぶ。

「往くぞ」

先手必勝。相手の能力が読めない以上、後の先は以ての外。故に仕掛けるのなら先の先。フェイトがソニックムーブで加速しようと体に魔力を奔らせた瞬間

勝負は決してしまった。

「えっ？」

十メートル先にいた筈の赤い髪の偉丈夫が、自分の目の前にいた。何の足捌きもなく、そして音もなく、十メートルと言う距離を一瞬で無にしたその動きこそ、「活歩」の歩法。フェイトの人生を大きく変えた第九十四管理外世界において、三千年の歴史を持つ中国拳法の一つ、八極拳の極意。だが、赤い髪の偉丈夫に見れば、それは極意と言うレベルではなく、もはや息を吸うのと同じである。

赤い死神がフェイトの懷に滑り込む。至近距離。この距離こそ

赤い髪の偉丈夫の間合いであり、自らの技術を最大限に発揮できる距離。

雷鳴の様な音が響き渡る廊下。踏み込んだ震脚が硬い廊下を踏み破き、放たれた縦拳がフェイトの細い胸元に直撃する。

それで全てが終わった。

フェイトの体が弾かれた様に後方に吹き飛ばされ、廊下の奥、約二十メートル後方の壁に叩きつけられ、倒れた。

「フェイト……ト……？」

茫然と背後を振り返る時雨。

悲鳴も呻き声もない。うつ伏せに倒れたフェイトは時雨の声に反応せず、石像のように倒れたままだった。

「……む。もう少し、楽しませてくれるかと思ったが……つまらぬな」

赤い髪の偉丈夫は期待外れだと言わんばかりに、溜息を吐いて、視線を時雨に向けた。

「っあ……」

殺される。

こうして視線を合わせているだけで、死のイメージを叩きつけられる。何をしようともがこうとこの男の前では自分は哀れなムシ

ケラだ。一撃目は何故耐えられたのか分からないが、この男は自分を確実に殺しに来ている。ならば、二度も轍は踏まない。次に自分に放たれる一撃は手加減などない。一撃で全身を吹き飛ばす。

「さて……」

赤い髪の偉丈夫が一步踏み出す。死のイメージがさらに膨れ上がる。ただでさえ、爆発寸前の理性がさらに暴走し、衛宮時雨と言う殻に輝を入れる。

「一戦一殺。何、案ずるな。せめて痛みのない様に冥土へと送ってやるう」

眼前に立つ赤い死の化身。

死ぬ。

「ではな」

拳が振り上げられる。

その瞬間、時雨の意識が透き通った。

死ぬ。誰が？ 僕が死ぬのかふざけるな嫌だ死にたくない何で僕が死ななくちゃいけないんだ何をしたフェイトを速く助けないといけないあのままでは危険だが自分にはこの敵を打ち倒す力も技術もない弱い。果てしなく自分は弱い何が方法はないのか自分が勝てないなら勝てる誰かを別の力を求めればいいそうであるじゃないか自分にはその力があるどうして気付かない簡単な事だ繋がっているのだ準備できているのだ待っているのだ後は僕の声一つ

でここに来る　　！

「　　い……？」

「ん？」

赤い死神の手が思わず止まる。それは衛宮時雨が生を掴み取ったと同意。

「　　来い。バーサーカー！！」

叫ぶ。はるか遠い場所にいる彼に聞こえる様に大声を上げて叫ぶ。

その声が聞こえたのか、腰に付けているカードフォルダが輝き

「　　！！！！」

「ぬおっ？！」

獣の咆哮にも似た人間の声。圧倒的な覇気を発しながら、巨大な何かの一撃がアサシンを吹き飛ばした。

敵にダメージはない。服が僅かに切れたただけだ。

背後に感じる膨大な魔力と、燃え盛るマグマのような熱。時雨はゆっくりと起き上がり、後ろを見た。

鎧を纏った東洋系の武人

彼の英雄溢れる三国志演技に

おいて、最強の武人に裏切りの将、孤高の星を抱く武将、呂布奉先。それが衛宮時雨のバーサーカーとして現世へと召喚された。

「くはははははは！ これは驚いた。彼の飛將軍か！ あの娘同様、とんでもない者を呼び出しおったか。もう一人の担い手よ！」

有名な英霊ほど、一目で看破される事がある。おそらくバーサーカーの右手に握られている長柄武器から判断したのだろう。呂布が愛用した武器として名高く、大型両手武器の特徴をすべて備えた名作、方天画戟。あまりにも象徴としては有名すぎる武器だ。

「担い手……？ それにあの娘同様って………どういうことだ？！」

「さあて、な。それをお主に教えてやる義理はない。にしても………呵々々々！！ 滾る、滾る滾るぞ！ 呂布奉先と武を競えるとは、何と幸運な事か！ さあ、武の極地、儼に見せてみよ！」

殺意が膨れ上がる。それに呼応してか、バーサーカーが前に出て、敵の殺意に負けない………否、圧倒する殺意を持って敵対する。

空気が重く、息苦しい。体に見えない重りがのしかかる。

これが英霊                      歴史に名を残し、英霊の座に選ばれた霊長の守護者達の戦い。

一合でもぶつかれば、ここにある全てが灰塵に帰すだろう。それほどの魔力と力が込められている。赤い髪 of 偉丈夫もバーサーカーも、小手調べなんて言葉はない。初撃必殺。最初の一撃で全てが



終わる。

と、赤い髪 of 偉丈夫が眉を潜めた。

「何？ ……しばし待て。今、良い所  
分かった分かった。戻ればよいのだろう戻れば」  
ああ、

アサシンが大きく息を吐き、どこか名残惜しそうな顔を浮かべた。

「すまぬな。あの娘が呼んでおる。今日はここまでだ。……やれやれ、あの双子を使わなければよいモノを」

アサシンの姿が消える。霊体化したのだろう。時雨のサーヴァント達同様、アサシンのカードがひらりと落ちて、消えた。

「担い手……？ どういうことだ。何が起こってるんだ……？  
っそうだ。フェイト！」

湧き出る疑問。しかし今はフェイトの元に駆けつけるのが先決だ。

鈍い痛みを胸に感じながら、時雨はフェイトの元へと走った。

「では明日、この場所にてお待ちしています」

「ええ。分かったわ」

ホテル「アグスタ」からはるか遠く離れた森の中。ボディースーツを纏った長身の女性は一礼して、その場を後にした。

「良いのかマスター？」

背後を守っていた赤い騎士はぼつりと尋ねた。

「良いも悪いも、まずは話を聞くだけ聞いてみよう。

でも意外だったなあ。彼を保護している部隊、思いの他出来るし、それにバーサーカーまで召喚した……。極めつけは、まさかこっちが先に力尽きちゃうなんて思いもしなかったよ」

苦笑を洩らす彼の主。

「……はあ。ある意味では、これは見えていた展開だったな。

キャスターは我々の中でも一、二を争う大食いだ。これならランサーか、ライダー辺りを出せば十分だったのではないか？」

「うーん……ライダーはともかく、ランサーはどうか？　ちやんと舞台を整えてあげた方が頑張ってくれそうだし……まあ、今回は私のミスって事で仕切り直しだね」

「……ミス、か」

赤い騎士は意味深な呟きを漏らす。

「それが、自然なミスであるならば問題はないが、な」

「……アーチャー？　何か言った？」

「いや、何も。では、家に帰るとしよう。君は帰ったらすぐにベッドに入れ。今日は一日じっとしているよ」

「はいはい。分かりました」

「はいは一回だ」

赤い主従は森の奥に消える。

また再びぎしりつと、運命の歯車が噛み合った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1683q/>

---

聖杯の守り手達(Fate/EXTRA×魔法少女リリカルなのはs t s)

2011年2月8日14時14分発行